フォルトゥーナは斯く語りき

伽藍

眼の前に盛り付けられた果実を、一つ口に放り込む。薔薇の一種だ。
やや酸味が強い。この辺りは好みだろうと考える事にする。別に甘い味が好きな訳でもなかったからだ。
指に付着した果汁をちらと舌で舐めながら、男は視線を滑らせた。視線の先には、人間がいる。人々が、当たり前のように存在している。
儚い。
そう思った。けれども力強いと、そうも思う。そもそも、共に存在し得ない言葉こそが存在しないのだ。
人間なのだろう。
生きているのだろう。
喧噪。
それなりに繁盛しているらしい、飲み屋だった。二つ横の席では、大柄の男がやはり大袈裟な身振り手振りで前の女に話し掛けていた。
暗く沈んだ顔でちびちびと杯に口を付ける男。
真っ赤に染まった顔で、機嫌良く笑う、女。
何を思っているのか、無表情のまま酒を口に運んでいる男。詩人だろうかと、男は頭の片隅で考える。根拠は無い。その代わりに、興味も無かった。
茶の色をした器に、果実が乗っている。その横に、一杯の蒸留酒。男が頼んだのはこの二点のみだ。
杯には、殆ど手を伸ばしていない。
夜も更けた時間である。周囲の音を切り離せば、途端に男は独りになる。
否。
男は元々、独りだった。
待っている。
二十代の半ばになろうかという年齢の青年だった。双眸は、淀んだ水の中に昏く沈んだ苔の色をしている。
男は眼を瞬かせた。再び、果実を口に運ぶ。今度のそれは、先程のものよりも少しばかり甘かった。陽に多く当たったのだろうと考える。
音の流れは、男を綺麗に素通りしていく。男も捉えようとはしない。
男は独りだった。
待っている。
唇には、あるかなしかの笑みが浮かんでいる。
彼は間違いなく、歓喜していた。
己の身の内から湧き上がる感情に名前を認めた瞬間、彼ははたと覚醒した。音が戻って来る。喧噪。
騒。
青年は笑う。絶望を抱え込んだ少年のような、一切の邪気を知らぬ貌で。

寂。
夜は黙して静かなのに、こんなにも煩いという、ただそれだけの事が可笑しくて堪らなかった。
耳を澄ませば、恐らくは聞こえてくるのだろう。鬱陶しい程の生命の音。
男には興味が無い。
だから、彼の周りは静寂に包まれている。
青年の体は、暗色の法衣を纏っていた。これが彼の職を表すかといえば、そうではない。
がた、と一際大きな音がした。男の横合いからだ。ちらと視線を向ければ、女と話していた大柄の男が、先程彼が詩人かと考えた男の胸倉を掴み上げていた。
喧嘩か。
演技に似た女の悲鳴、焦ったような店主の声、囃すような声、不安の滲んだ声、何事かと問う声。今日も世界は平穏無事だ。
男はのんびりと苦笑した。
全く、良い気分に浸っていたというのに。最後の実を口に放り込んで、青年は立ち上がる。杯の中身は、結局殆ど減らぬままだった。
一体何が原因なのかは、さっぱり判らなかった。恐らくは、肩がぶつかったとかぶつからないとか、それと同等の理由であろう。暴れられればそれで良いのだ。
絡まれた男の方は細身で、とても力があるようには見えない。
ぐるりと人が周囲を囲んだ、そのぽっかりと空いた空間を、男は堂々と横断した。誰も視線を寄越してはこない。
そのまま出入り口を潜ろうとして、男は少しだけ動きを止めた。
暫し考えた末、カウンターに金を置いておく。外に出ると、騒ぎを聞き付けた人々が集まって来る所だった。
空を見上げる。雲は無い。
ぽつりと、孤独に、間抜けに、何の唐突も無く、月が浮いていた。
中途半端に欠けている。
その滑稽さに少しばかり笑い、男は人々の波とは逆の方向へ歩き出した。誰もいない道を歩いているかのような足取りで。
途中、一人の少女と擦れ違った。
何故かは判らない。ただ、男は知っていた。だから、振り返った。
少女は、この夜の喧噪とはまだ無縁と言える年齢だった。その視線は、確かに男を捉えていた。
苔の色が見開かれる。

眼が、合った。

そしてだからこそ、男は今度こそ狂喜し――衝動のままに少女の細い手首を掴んでいた。
あまりにも非常識な行為に、少女が眼を細める。それにも構わない。

半ば呻くように、こう言った。
「見付けましたヨ」
私の愛しい『名付け親』ーー。
「何……？」
「初めまして、忌み子サン」
男は言う。そうして、笑った。邪気の欠片も無く。
絶望の正体を知った少年の喜劇を眺める観客の表情で。

雪は既に地上から姿を消している。まだ肌寒い日が続いているが、それも今暫くの事だろう。
地面からにょっきりと顔を出している薄い茶色の植物を見付けた。名前は知らない。マッチ棒に似ている、とアンは思った。
触れてみると、先端は少しだけ固い。面白いと思った。こんな小さなものなのに、意外と複雑なのだ。
面白いと、そう思う。
人間よりも、余程面白い。
隠しもせずに大きな欠伸をしてから、流石にはしたなかったかと口許を押さえた。遅過ぎる事は百も承知だ。
平和だ。
最近では、大きな戦も無い。アンが生まれてから今までに、小競り合いが数度あった程度で、それだって風の噂で聞いたものだ。
良い事だ。平和は、良い。
どうせすぐに、人は血を求めるだろう。
王都の近くでは薄い赤色の花が満開だった。何という名だっただろうかと、思い出してみる。
生憎、浮かぶものは無かった。
あの花はすぐに散って仕舞う。人間よりも余程あっさりと。
潔く。
それが美しいとは思う。けれどもどちらが良い事なのかは、アンには判らなかった。
上にあるのは蒼い空だ。雲一つ無い。恐らく暫くは天気の良い日が続くだろうと思った。
天気に良いも悪いも無いのだが。
本当は。
「……あ」
アンは足を止めた。目的のものを、そこに見付けたからだった。
どうしようか。そう考える。
どうしよう……。
自分はどうしたいのだろう。
答えは見付けられなかった。仕方無い、自分は答えなど持っていないのだ。
本当は。
足を踏み出す。
「お嬢ちゃん」
声を掛けられて、アンは振り返った。数人の男が眼に入る。いずれも体格の良い青年だった。
「何してんの？」
「林檎を見ていたのよ」
アンは視線を下ろした。熟れた果実を手に取って見せる。
「美味しそうだと思わない？　ねぇ、おじさん、これ幾らかしら？」
そう言って、彼女は果実の籠の持ち主に笑みを向けた。男は少女を見て少しだけ笑んだようだ

ったが、横の男達を認めると、途端に迷惑そうな顔をした。
「そりゃ売りもんじゃないよ」
「それでは腐って仕舞うわ」
「腐らせる為にあるんさね」
　敷き物の上に腰を落としたまま、虫でも払うように手を振られる。流石にむっとして何か言ってやろうかと思ったが、それよりも男の一人の手がアンの肩を掴む方が早かった。
「痛！　貴方、力の加減というものを知らなくて？」
「おう、悪いな、お嬢ちゃん」
　悪びれた様子の無い男に、アンが色素の薄い眼を細める。
　気付けば、彼女と彼女を囲む三人の男達は、通りの人間から遠巻きにされていた。果実売りは相変わらず素知らぬ顔で煙管を吹かしている。
　男の一人がアンに近付く。その足が、アンが先程眼を留めた小さな植物を踏み潰した。
　それに、腹が立った。
「いい加減になさい、下衆共！」
「全くだな」
　蹴りの一つでも見舞ってやろうかと動いた時、自然過ぎる流れで、少女の声が会話に入って来た。男達も唖然として動きを止める。
「な、何だお前ーー」
　そこにいたのは、影ーーだった。
　否、違う。一人の少女だ。年の頃はアンと同じか、少し上だろう。伸びるに任せたという態の髪を、無造作に結紐で括っている。
　灰色の唇を歪め、彼女は笑っている。
「通りすがりの者だ」
「は、ーー」
「ば……」
　化け物ーーと。男の一人が言った。
「目障りだなぁ」
　ふ、と彼女は極自然に溜め息を吐き出しーー果実売りの使っていた煙管を、ひょいと奪い取った。
「何をするかね、嬢」
「怒るなよ」
　一拍吸って、持ち主に戻す。あまりにも自然な動作に、誰も反応出来なかった。
「な、何なんだ、てめェ」
「うん？」
　つい、と。
　少女は視線を滑らせた。並べてある鮮やかな果実を見て、それから思い出したように。
「まだいたのか」
　男達は当然の如くいきり立ち、呪いの言葉を吐き出した。それに笑い、動く。

　ばしゃ、と。
　筒の水を打ち撒けられたのだと、男達が理解するのに数秒。頭が命令を下すのに数秒。動き出すのに、更に数秒。
「私の前で、品の無い言葉を使うなよ――」
「え、はい!?」
　アンが思わず声を上げたのは、少女に己の右腕を掴まれていたから、で。
　突然の事に何の抵抗も出来ないまま引き摺られる。
「走れ」
「意味が判らないわよ、貴女！」
「気にするな」
「気に、って……」
　こちらを伺っていた人々の間を器用に擦り抜け、男達の怒鳴り声から急速に遠ざかって行く。何故かは知らないが、アンは笑い出したくなった。
　だが、走りながらだと流石に体力が続かない。途中で咳き込んだアンを、少女が不思議そうな顔で流し見た。背はアンの方が少しだけ高い。
　相手は息一つ乱してはいない。それが悔しくて、アンは意識して平然とした表情を保ち続けた。
　騒ぎの中心から外れ、更に村の端へと移動する。途中で何度か、地面に転がる石に足を取られた。王都のように道が整えられている筈も無い。
　大分人気の無くなった場所で、漸く二人の少女は立ち止まった。それまで、殆どずっと全力疾走をしていたのに近い。アンを引き摺って来た少女も、流石に息を乱していた。
「こ、ここは――」
　何度か咳き込む。呼吸の苦しさが消えるのを待ってから、アンはもう一度言った。
「ここは、助けられたと見るべきかしら？」
「さぁ、どうだろうな」
「適当ね」
「何も考えていないのかもな」
　他人事のようにそう言って、少女はくつりと笑った。気分を害した訳ではないらしい。
　黒、黒、白、灰。ゆっくりと、その全身を観察する。
　真白に近い肌を凝視していると、その視線に気付いたのだろう、彼女は笑んだ。
「珍しいか？」
「……珍しい、というか――」
「構わないよ」
　灰色の唇を歪めて、彼女は言う。アンは沈黙する。
　少女には、凡そ色彩というものが存在しなかった。

「面白いな」
　アンの名前を聞いた少女は、そう言って軽やかに笑った。大切な人から貰った名前を笑われたアンはと言えば、可愛らしく頬を膨らませる。
「あら。名前に面白いも面白くないもあって？」
「怒るなよ」
　未だ上機嫌に、彼女は言う。
「私と対だな」
「……え？　何の事？」
「名前さ。アンは、一という意味だ」
　そう言われても、アンには判らない。
「あたし、貴女の名前も知らないのよ？」
「おや」
　少女は眼を見開いた。両目とも、吸い込まれそうな程に澄んだ黒曜の瞳だった。
　遠くで小鳥が鳴いている。案外近くなのかも知れない。アンには、それは判らなかった。
　先程よりも、僅かに雲が増えている。それでも、雨は降らないだろう。
「それは失礼。知っているものだと思っていたよ」
「どういう意味？」
「深い意味は無いさ」
　少女は言った。よく笑う娘だと、アンはそう思う。
　本物だろうか？
　判らない。色を持っていれば、これ以上なく美しいと称えられただろう。色が無くとも、その異常性を除けば充分過ぎる程美しい。
「私の名は、レイと言う」
「レイ？」
「そう――、……『何も無い』という意味だ」
　アンは瞬いた。
　何も無い。
　偶然、その意味を持っていたのだろう。それを知っていて名付けたとしたら、信じられない話だ。
「……宜しく、レイ」
「初めまして、アン」
　場違いな挨拶を交わして笑い合う。レイには本当に色彩が無い。着ている服すらも黒いので、色を入れ忘れた絵画を見ているかのようだった。それも、とても素晴らしい出来の。
　じっと見ている事に気付いたのだろう、レイが笑う。アンは気付かれたと判って、ぱっと顔を赤くした。
「ごめんなさい」
「構わないよ。生まれ付きだ」

「……病気か何か？」
　仮令病気だとしても、ここまで完璧に色が抜け落ちるというのも可笑しい。
　否、……不自然だ。
　先天的にそういう人間がいる事も聞いた事がある。しかし、その場合には瞳の色が黒い理由が見付からない。
　まるで、本当に、モノクロの写真を切り取って現実の風景に貼り付けたかのような――違和感。
「素直だね」
「……ごめんなさい」
「二度目だ」
「え？」
「この短時間に謝られたのが、だよ。――ん」
　レイは前触れ無く足を止めた。隣で歩いていたアンは、当然のように反応出来ず、数歩先を行って仕舞う。
「レイ？」
　彼女は反応しない。視線の先に眼を向けると、若い男が焼いた肉を売っているようだった。
　先程から感じていた良い匂いは、これだったのか。
「食べるか？」
「いいえ、別に……」
　言った瞬間、アンのお腹がきゅう、と鳴った。アンは顔を真っ赤にし、レイは一瞬きょとんとしてから笑い出した。
「判った、行って来よう」
「ちょ、……もう、レイ！」
　笑い止まないまま男の元へと行って仕舞ったレイに、アンは溜め息を吐いた。自分もそう周りに気を遣う方ではないが、彼女は奔放過ぎる。
　怒っている事を主張するように腰に手を当てて待っていると、暫くして少女が戻って来た。小振りな肉片から漂う匂いに、怒りも萎んで仕舞う。
　渡された食事に、素直に齧り付いた。
「子供のようだね」
「貴女は……！　本当に、一言も二言も多いわ！」
「それは失礼」
「二回目ね」
「……？」
　きょとんとするレイに、アンは胸を張って言ってやった。
「この短い時間に、謝られた回数が、よ」
「うん」
　同じように食べている筈なのに、レイは全く行儀悪く見えないのは何故だろう、とアンは先程と同じように歩き出しながら考えた。無論、答えが出る筈も無い。

　意味も無く楽しそうな様子に、少しだけ首を傾げる。
「何を笑っているのかしら？」
「いや……こんなに人と話したのは、久し振りだから」
「――この村に住んでいるの？」
「旅の途中さ。君と同じでね」
　アンは瞬いた。長い髪が、風に流されてさらりと揺れる。
「何で判るのかしら」
「その年頃の女が、動き易さを重視した服装をしている理由なんて、限られているよ。それに、先程走っていた時、道に慣れているとは言えない動きだったしな」
「……貴女も同じくらいじゃなくて？」
「何が？」
「年よ」
「あぁ……。さて、どうかな」
　ふふ、と笑うと、少しだけ食べ残しの肉が付いた骨を偶々近くを通った犬にくれてやる。無意味な事が好きな少女だと、その頃にはアンもこんな判断を下していた。
　薄い灰色の唇、白としか言えない肌。
　彼女には、世界がどう見えているのだろうか。
「貴女――」
　しかし、アンから出たのは別の問いだった。
「一人で、旅を？」
「いや、……うん。あぁ、どうだろう」
　本気で考え出したレイに、彼女は顔を引き攣らせた。自分の状況が判らないとなったら、中々面倒だ。
　しかし幸いにも、そんな事は無かったらしい。
「連れは一人、いる。……筈だが、数日前からどこぞに行っていてな」
「……大丈夫なの？　それ」
「問題無いさ。あいつに危害を加えられる人間は存在しない」
　きっぱりと言い切って、レイは少しだけ笑う。そうして、冗談と、ほんの少しの本気を籠めて口にした。
「存在したら、どんなに良い事か」
「……どんな人よ、それ」
「さてな。それに、よくある事だよ。今更心配なぞしないさ」
「そう――」
　アンは、そう言って、暫し思案した。食べ終わった残りは、近くの草むらに捨てて仕舞う。
「だったら、暫く一緒に旅をしない？　あたし、どこに行くとか決めていないのよ」
「奇遇だね。実は私もだ」
「もしかして、親に、大人になったんだから一人で世間を見て来い、とか言われて追い出され

た口？」
「……年頃の娘に向かってそれはどうなのだろう。いや、でも……私も、同じようなものか」
「じゃあ、決まりね」
　アンは笑った。
　無邪気な様子に、レイも少しだけ笑う。再び、風が流れた。
　少女達は笑う。
　楽しくなりそうだと、そんな予感があった。

予感があった。
アンと行動を共にし始めてから、数日。既にあの時の村からは立ち去り、隣の町へと向かう最中だった。
少々遠いらしく、途中で陽が暮れた。アンの寝顔を、レイは眺めている。二人揃って寝る事は、単なる自殺行為だ。
特に眠くはない。
寧ろ、意識は普段よりも冴え渡っていた。耳に入る虫の音、鼻を擽る土の匂い、肌を掠める風の流れ。
その一つ一つに、確かめるように意識を向けながら、レイは待っている。
予感があった。
咲き始めた花は、陽光の下でならば、淡い水色に見える事だろう。群生している小さな小さな花を眺めて、そう思う。名前は何と言ったか。
この花も、季節が流れるのを待つ間もなく散る。それを知っている。
それが命だ。
それが人の愛する美しさだ。
ならば何故、人は生に拘るのだろう。
どこで人間は、勘違いしたのだろう。
考え始めて、レイは、軽い舌打ちをして思考を打ち消した。無意味な行為をせせら笑う。
予感があった。
不意に、鼓膜を震わせた虫の音。それに、彼女は、ぴくりと顔を上げた。
「……来たか」
呟く。
耳に届いたその音は、この季節ならばあり得ない筈のものだった。知っている。
あいつの前では、全ての法則は意味をなさない。何故ならばそいつは、法則を真っ向から否定する存在だから。
あり得ない秩序。
意味の無い法則。
知っている。
ちらと、視界に映ったものは、雪だったのかも知れない。違うのかも知れない。何でも構わない。何故ならば何でもあり得たし、全てはあり得ないものだったからだ。
「何をしていた？」
彼女は問う。夜に話し掛けるように。
夜から、返事があった。
「野暮ですねェ。私だってお年頃なんですヨ」
揶揄するような声。或いは嘲笑するような。
世界の全てを、見下すような。
夜が動く。

「相変わらずの不愉快さだな、魔術師――」
　魔術師、と。
　彼女は口にする。だからその瞬間から、夜の名前は魔術師となり、夜の形は魔術師になった。
　魔術師は嗤う。
「それはそれはいけませんねェ。何が視たいですか？　夢？　希望？　それとも愛？　たった一つを除くなら、この魔術師、何でも叶えて差し上げますヨ」
「消えてくれると一番良いのだけどね」
「ヤァですねェ。たった一つを除くなら、って。ちゃんと言いましたヨ？」
　魔術師は嗤う。
　それを、彼女は受け流した。
　夜が動く。夜にはあり得ない愉快と不愉快と、快と不快とそれから不可解を伴って。
　ゆっくりと、レイに跪いた。
「ただいま戻りました、レイ」
「うん、お帰り」
　あっさりと頷く。それに、魔術師は笑った。
　立ち上がり、レイの格好を見て浅く溜め息を吐く。
「お風邪を召されますヨ、レイ」
「平気だ」
　彼女の返答は無視して、どこからか取り出した外套を羽織らせる。礼も言わないが文句も言わないレイににっこりと微笑みかけると、未だ眠り続けている少女をしげしげと見下ろした。
「彼女が『アン』ですかァ？」
「そうだよ」
「ふぅん……そうですか。ヘェ」
「……？」
　レイには、魔術師の不機嫌の理由が判らない。首を傾げて、男を見上げる。
「問題でもあるのか？」
「いいえ？　まっさかァ。私が貴女のする事に文句を言う筈ないデショ？」
　そう言いつつも、やはり不満そうである。
　暗い色の外套を羽織り直して、レイはゆったりと樹の幹に体を預けた。小さく欠伸をする。
「眠いのデスか？」
「先程までは大丈夫だったんだが……」
「良いですヨ。眠って下さい。この魔術師が、貴女の眠りを妨げる一切合切を排除致しまショ」
「頼む」
　もう一度小さく欠伸をして、本格的に眼を閉じる。その一瞬前に見えた顔に、レイは笑った。
「何故、不機嫌なんだ？」
「別に……」
「教えろ」
　魔術師は頬を膨らませた。非常に子供っぽい仕種だ。そういえばアンも時々する仕種だと、思

って笑う。
「良いですケドぉ。オトモダチばっかり構ってないで、私も見て下さいネ？」
「ーーーーー」
　思わぬ返答に、レイは呆れた。今度こそ眼を閉じて、眠る体勢に入る。
　呟くように、口を開いた。
「……それを、お前が望むなら」
「えぇ、そうーー良いんですヨ。貴女がその人生の片隅にでも、私を置いて下されば」
　刹那にっこりと、魔術師は微笑んだ。その表情を、レイが見ていないと知りながら。
「お休みなさい、レイ」
　魔術師は笑う。
　魔術師は嗤う。
「良い夢を、私の唯一」
　ちらちらと、雪が舞っていた。

すぅ、と鼻から息を吸い込む。
嗅ぎ慣れた香りが、嗅覚を刺激した。
甘く懐かしいような。
切なく擽ったいような。
僅かに湿り気を帯びた匂い。
優しさの象徴のような。
何の匂いだったか。
幸せだ、と思う。幸せだ。
温かい。
何の匂いだったか。
「……？　――！」
しかし、それが緩やかに腐りゆこうとしている枯れ草の匂いだと気付いた時――そのあり得ない事態に、アンは条件反射で飛び起きた。
す、と頬を汗が伝う。
背は湿っていた。
「……は……っ」
額を拭い、そっと横を見る。この数日で見慣れた、少女の寝顔。
あぁ、眠って仕舞ったのかと、思った。起きていると、言っていたのに。
「――夢……？」
優しい夢だった。心地良い夢だった。
酷い夢だった。もう二度と見たくないと、そう思うくらいに。
内容なぞ覚えてはいないのだが。
かちかちと煩いとそう思って、遅れて自分が震えている所為だと気付いた。歯の根が噛み合わない。そんな自分が滑稽で、嗤った。
「今は、春よ」
ふと視線を落とした先にある、小さな小さな儚い花。今は見えないが、その色が水色である事を知っている。
だから、春だ。
秋の匂いなんて、どこにも無い。
安堵する。
体から力を抜いて、アンは一つ息を吐き出した。不意に、考えもないまま空を見上げる。
月は細い。嘲笑ってでもいるかのようだった。
ただの妄想である事を知っている。
笑う。
レイの寝顔を見下ろして、少しだけ頬を緩めた。この数日間を、共に過ごした少女だ。
色の無い少女。彼女の人格を、アンは大体掴んだ心算だった。一見すると判り難いかも知れないが、好感の持てる人間である事は確かだ。

　気も合う。
　アンはレイを信頼していた。恐らく、レイも同じだろう。
　このまま一緒に旅をしていれば、誰よりも大切な親友になれるだろう。
　なれたかも知れない。
「……どんな夢を、見ていたのかしら」
　ひそり、とアンは呟く。自分に向けた問いだった。
　レイはまだ寝ている。同行者が起きた事にも、気付いていない。無防備な寝顔だった。それが少しだけ意外で、アンは笑いを噛み殺す。
　すら、と短剣を抜き放つ。少ない月光を反射して、ちらと光が揺れた。
「ありがとう、レイ」
　アンは言った。微かに笑う。
「楽しかったわ。ごめんなさい」
　自分は笑えただろうかと、そんな事を考えた。
　夢を、見ていた。
　どんな夢を見ていたのだろう。
　考えてみる。何と無く、温かい夢だった気がする。春の日差しのような。寂しい夢だった気がする。秋の涼風のような。優しくて、悲しくて、幸福しかない絶望に似た夢だった気がする。
　自分は。
　この数日間、ずっと。
　アンは笑った。今度こそ笑えたと、確信が持てて、その事に安堵した。
　息を吸い込む。
　微かに香った、春の花の匂い。
　それから、枯れ草の。
　ぐっと、右手に力を籠めて短剣を握り直した。微かに上下する左胸に狙いを定める。
「お休みなさい、レイ」

殺したと、そう思った。
左胸。心臓。その上。確かに。
貫いたと、そう思った。
「ーーえ……？」
なのに。
アンの視線の先には、誰もいなかった。
「知っていたよ」
ひそり、夜が動いた。
「う、そーー」
呆然と、短剣を持った右手をだらりとぶら下げたままで、アンが振り返る。薄い色の瞳が彷徨って、色の無い少女を捉える。
細い月に照らされたレイは、影そのもののようだった。
「レイ……」
「叔母君に、言われたのだろ？　アン」
「何で」
「彼女くらいしかいないからな。私を殺そうとする人間は」
レイは、淡々と、寧ろ穏やかに、微笑みすら浮かべてそう言った。
それがどうしようもなく悲しくて、寂しくて、アンは声を詰まらせる。ぐっと眉間に力を籠めて、眼を瞑った。
「殺そうと、そう思う人間すら、私にはいないから」
「レイ……何故？　何故あたしがそうだと、判ったのかしら？」
「そんなの決まっているだろう？」
レイは笑った。
何の邪気も無く、何の屈託も無く、足りないものは何も無いとでも、そう言うかのように。
足りぬものすら知る術の無い、幼子のように。
「何の目的も無く私に近付いて来る人間が、いる訳ないじゃないか」
「……！」
今度こそ、アンは呼吸を完全に止めた。喉が、ひくりと引き攣った音を立てる。
そうやって、生きてきたのか、この少女は。
今まで。
ずっと。
孤独も、何も、知らないまま。
「残念だったな、私を殺せなくて。別に、死んでやっても良かったのだがね。その程度には、この数日間は楽しかった」
けれども、とレイは肩を竦めた。
「悪いが、少し遅かったな。連れが、戻って来て仕舞ったんだ。物好きな男がね」
「……え？　連れって、どこにーー」

「そこだよ。君の後ろ、五時方向だ」
　そう言われて、アンは振り返った。そして、心底から驚く。
　自分は、幼い頃から、レイの言う『叔母君』の道具となる為に育てられてきた。そんな自分に不満は無かったし、彼女の力になれる事を誇りにすら感じていた。
　力はある。
　力は、持っている。
　なのに、この自分が、気付かなかった――？
「……だ、れ」
　そこに、夜がいた。
　風が揺らめく。それが潮の香りを含んでいるような気がして、アンは顔を顰めた。
　この辺りに、海は無い。
　アンの疑問に答えたのはレイだった。
「魔術師」
「魔術、師……？」
　彼女は、耳に届いた言葉を、そのまま口にした。何も考えずに。だからその瞬間から、夜の名前は魔術師になる。
「えぇ、えぇ！　そうなんですヨ！　私は魔術師、昨日も今日も明日もネ！」
　夜は、男は、そう言って、道化るような笑みを刻んだ。
「誰」
「貴女が決めたんでショ、暗がりサン？」
「誰」
「やあっだなァ」
「貴方は、――誰？」
「――――」
　そこまで来て。
　漸く、魔術師は笑みを消した。一つ瞬いて、レイを見遣り、ゆったりと首を傾げる。質問の意味を理解出来なかった子供の仕種で。
　そして次の瞬間、――魔術師は狂ったように笑い始めた。
「成る程、成る程、成る程ネ！　レイ、貴女が気に入る訳ですヨ――面白いなァ。私にそんな質問を投げたのは、貴女で二人目デス」
　アンは眉を寄せた。
　魔術師は再び笑みを消す。飽いたかのように。
　その時、初めて眼が合った。
「――！」
　息を飲む。特に何もない。何が、違う訳でもない。
　淀みの中に永い間置き去りにされた、暗く沈んだ苔の色だ。その事を、アンは認識して、恐怖した。正確に言えば、認識したという事実に対して――その異常さに気付いて――彼女は、言い知れぬ恐怖を抱いたのだ。

　この、眼の前の男に。
　何故、判るのか。
　何故、判ったのか。
　何故ならば今は夜で、細い月が弱々しい光を齎しているだけで――そしてその光は、一切を影へと変えようとしているようで。
　色が判る筈など、ないのに？
「やり過ぎだよ、魔術師」
「あぁ――済みませんネ、レイ。妬いちゃったんですヨ。この数日の間、貴女という宝を独り占めしていた雌豚にネ」
「魔術師」
「スミマセンー」
　叱責を孕んだ呼び掛けに、魔術師は反省も見せずに謝罪した。けらけらと笑って、アンを見遣る。
　違う、とアンは己の認識を訂正した。
　彼は一度も笑っていない。
　この男は、ただ。
　只管、嗤っている――。
　アンを？　彼女は否定する。
　レイを？　彼女は否定する。
　世界を？　彼女は否定する。
　全てを？　彼女は否定する。
　魔術師は嗤っている。魔術師は魔術師自身を嗤っている。可笑しくて堪らぬと言いたげに。
　そんなアンを見て、魔術師は、感嘆の溜め息を漏らした。
「殺すには惜しいなァ。どうします？」
　視線を流す。しかし、レイはアンを見詰めていた。レイは魔術師に答えない。
　やっぱり殺そうかな、という思考がちらと魔術師の脳裏を過ぎった、その時。
「――――――――あァ!!」
　不意に。
　突然に。
　本当に何の前触れも無く――アンが動いた。
　それは恐らく、恐怖と恐慌と混乱と狂乱と、それ以外の全てが混ざり合って膨れ上がって決壊した、結果――だったのだろうが。
　思い出したように、アンは、少女は、風のようにと称するに値する速さでレイへと迫り、短剣を彼女の腹へと吸い込ませ、そして、――――――――血を吐いて崩れ落ちた。
「え……!?」
　げほ、と何度か咳き込んで。
　己でももどかしく感じる動きで上体を起こし、腹部を確認する。

　短剣が刺さっていた。
「な、に？」
「君のですヨ、暗がりサン」
　お返ししマス――男は言う。
　アンは認識する。自分は短剣を持ってはいない。自分の腹部に刺さっている、これは、己が持っていたものだ。
　レイを見上げる。視界は霞んでいた。
　元々暗くて、彼女の美しい顔は見え難かった。月を背にして仕舞えば、もう全く見えなくて、それが惜しいと思った。
　最期くらい、彼女の顔を見たかった。
「……殺しなさい、レイ」
　アンは言う。穏やかな声音で。
「王位継承権零位、第一王女レイ。あたしは貴女の叔母の命令で、貴女を殺しに来ました」
「知っていたよ。最初に君が、私を見付けたんじゃないか」
「えぇ、とても見付け易かった。――嘘ではなかったのね、呪われた姫、というのは」
「やれやれ。気にしなくても、私には王位継承権なんて無いのだけどね」
　彼女は笑った。相手も笑った。
　寝る前までの、あの空間に戻ったように。
　最初から、崩れてはいなかったけれど。
「さぁ、殺しなさい」
「叔母君の所に戻れよ、アン。私は君を殺さない。――魔術師」
「はいはァい。お休みなさい、暗がりサン」
「ま、――待って！」
　失敗した自分に、帰る場所など。
　居場所など。
　言おうとした。しかし、レイに、誰よりも居場所の無い少女に、その言葉を吐く事が出来なかった。
　結果として、その言葉はレイには届かず――一瞬の迷いを断ち切るよりも、魔術師の方が早かった。それだけだった。
「殺さないんですかァ？」
「殺さないよ」
　意識を失ったアンに、レイは応急措置を施してやった。元々深い傷ではない。彼女の体力を考えても、次の街までくらいならば、平気な筈だった。
　確かに友と思った少女を見下ろして、影は呟く。
「『ありがとう』？　『楽しかった』？　――それは私の台詞だ」
　感謝したのは自分だ。楽しい思いをしたのは自分だ。一時の夢を、見たのも。
　レイは笑った。笑って、横で佇む夜に視線を向ける。
「行くぞ。――今から行けば、昼過ぎには着く」

「判りましたヨ、レイ。貴女が言うならば地の果てまでも」
　魔術師は一礼した。

「きゃっはァ！」
「……そろそろ私は君を殴り倒すべきかな」
　横のぼそりとした呟きは、青年の耳には天上の音楽のように聞こえた。
「嫌ですネェ、レイ？　家庭内暴力は反対ですヨ」
「誰と、誰が、いつ、家庭を持ったかな」
「自明の理って言葉知ってマス？」
「知っているよ。お前の夢だね」
　すっぱりと、レイは切り返した。
　肌寒い朝の事だった。そろそろ秋も深まろうかという時節、この男と出会ってから数日。
　何故、あの時あの瞬間、自分はあの場所にいたのだろうか――何度後悔しても、現実は変わるものではないと知っている。
　一つ息を吐き出す。
　息が、白く凝った。
「寒いデスか、レイ？」
「君の頭はいつでも春だから羨ましいよ、魔術師」
　魔術師、と。
　レイは男の事をそう呼んだ。だから、男は魔術師でしか有り得なかった。
「えぇ、そう、好きでショ、春？」
　ふわり、と春の匂いが香った。一瞬香った匂いを置き去りに、二人は疾走している。レイは、ちらと横目で魔術師の持つ枝を見遣った。
「どこから拾ってきた」
「その辺に咲いてましたヨ」
「今は冬の始めで、それは春に咲く花じゃなかったかな」
「忘れましタ」
　にっこり、と魔術師は笑った。
　否、嗤った。貌を歪めて。
　淡い色の花を見遣って、レイは今更だと溜め息を吐く。この男といると、一々この程度の事では驚いていられなくなる。
「……冬には、まだ早いか」
　喧噪は既に遠い。怒号も。
　それを確認して、二人は足を緩めた。
「何故、あんな嵐を起こした？」
「だぁってェ。貴女の事を、可笑しな眼で見るから」
「そんなの、今更――」
　沢山、いた。
　少女には生まれつき、色が存在しなかった。性質の悪い冗談のように。周囲の人間が不気味に思うのは当然の事だ。作り物めいた美しい顔立ちも、それに拍車を掛けた。

　沢山の人から、異端と詰られた。祝福されるべき第一王女、将来女王となるであろう人間が生まれるその前の夜、王が見た夢。
　魔女に呪われた娘。
　何故自分が呪われているのかを、レイは知らない。父王は多くを語らない。
　ただ、己が存在してはならない人間である事は知っていた。
「本当に？」
「何がだ」
「本当に、それが正しいと思ってるんですかァ、レイ？」
「……？」
　レイは横の魔術師を見上げた。
　魔術師は笑っていた。
　『レイ』は、レイ自身が己に付けた名前だった。レイには名前が無かった。存在しないものとして、生まれが抹消された。
　王位継承権、第零位。存在しない第一王女、レイ。表向きは、レイの弟が王の長子だ。
　そしてレイは、弟よりも遥かに優れていた。――不幸な事に。
　恐らく自分は、将来王家の誰かに殺されるだろうと、少女は理解していた。
「判っていないのは貴女ですヨ、そして周囲の人間デス」
「先程から、何の話をしている？」
「イエイエ」
　花の付いた枝は、いつの間にか魔術師の手の中から消えていた。
　出会ってから、数日。魔術師はレイの傍から離れようとしない。だから、レイは王宮に帰る事が出来ないでいた。
　レイには居場所が無い。だから、宛がわれた部屋にしか行けない。
　自分のような、災厄の娘には。
「本当に？」
「魔術師？」
「それが正しいと？」
　魔術師は笑った。
　不意に思い出した。自分は、この男の笑顔以外を見た事が無い。

「君は、誰だ？」

　思い付いた質問を、そのまま魔術師に投げ掛ける。男はゆっくりと笑みを消し、瞬いて、それからまた笑みを浮かべて、言葉を紡いだ。
「魔術師ですヨ。貴女がそう呼んだんでショ？」
「名前が無いのは、面倒臭いな」
　レイは言った。どんな名前が合うだろうかと、考えてみる。
「十歳の子供に付き纏うのは単なる変態だと思うが」

「連れてって下さいヨ、王宮。きっと通されマスから、私」
「気付かれないだけだろ」
　彼女は言い返した。魔術師とは、この男は、そういう存在だ。そろそろ理解し始めている。
　彼は、彼自身が望まない限り、他者に認識されない。誰もが、彼を意識から外す。
　罪悪から眼を逸らして事実を忘れようとする、防衛本能のようなものだろう、と彼女は考えている。
「……」
　レイは沈黙した。この男は、出会った当初から、自分の腕を掴んだあの瞬間から、レイの素性を知っていた。知らない方が可笑しいとでも、そう言うように。
　あぁ。
　思い付いて、彼女は頬を緩めた。
「枷だ」
「ハイ？」
　ふわりと、春の匂いがレイの鼻腔を擽った。
　名残惜しむように。
「枷だよ。君に名前をくれてやる。……君には、あった方が良いのだろ？」
　魔術師が笑う。少女も笑う。
　レイは、その名を告げた。

「はい。これをお子さんに飲ませて、ゆっくり寝かせて下さい」
　ミツはそう言って、中年の女性に薬草を乾かした粉末を手渡した。渡された女性は、人の良さそうな顔を綻ばせて口を開く。
「有り難う、ミツ君」
「いえ」
　その笑顔に釣られたように、ミツも笑う。その右手には包帯が巻かれていて、それは薬草を探していた時に誤って傷付けた箇所だ。その包帯を巻いてくれたのは眼の前の女性である。
「こちらこそ、包帯、有り難う御座いました」
「良いのよ」
　はい、これ。消毒に使ってね。あぁでも、ミツ君の方が詳しいかしら。
　言いながら液体の入ったボトルを渡そうとして来る彼女に、ミツの方が慌てて仕舞う。
「大丈夫ですってば。気持ちだけで」
「あら、そう？　じゃあ、これ。お礼ね」
　どっさりと渡されたものに、ミツは内心で顔を引き攣らせた。
　文字通り山になる程の菜である。旅人であるミツも彼の同行者もそんなに食べる方ではないので、たっぷり五日分はあるだろう。
　有り難い。確かに有り難いのだが、……流石に飽きる。
「わぁ、有り難う御座います！」
　それでも少年は年上の女性の厚意に応える為に、精一杯の無邪気で嬉しそうな表情で礼を言った。恩を仇で返してはいけない。
　それから小首を傾げる動作をして、口を開く。
「折角だから、何か作って皆で食べようか」
　それは女性にではなく、ミツが今転がり込んでいる空き家で好き勝手に過ごしていた子供達に向けられたものだ。わっと歓声が上がり、少年は笑む。
「今夜作って、持って行きます」
「あら、お礼にならないわね。私も腕を振るうから、食べにいらっしゃい」
　良い人だと、思う。この村は平和だ。
　殆どの村人相手に、ミツは終始この調子である。修行中の身だからと無理にお金は貰っていないのだが、それでも食べるものに困った事はない。
　何度もお礼を言って去って行った女性を見送っているミツに、老人の声がかかる。
「本当に、ミツ君が来てから助かるよ。うちには医者がいないからな」
　村一番の長老である男の言葉だった。若輩者ですが、と答えながら、ミツは内心で苦い顔をする。
「ミツお兄ちゃん、帝都にいた事ある？」
「あぁ、うん。ちょろっと。お母さんとお父さんが、その近くだから」
「良いなあ！」
「お話聞かせて！」

一気にミツを取り囲んだのは、ミツが空き家に転がり込む前からここを遊び場にしていた子供達で、だからミツもどんな事があっても子供達を追い出す事はしない。
続け様に投げ掛けられる質問に一つ一つ丁寧に答えるミツと、彼を囲む子供達を、長老が微笑ましげに眼を細めて見ている。
彼の考えている事が、ミツには判った。恐らくはこのままずっと、ミツに留まっていて貰いたいと考えているのだろう。
願いに応えられないのは申し訳無いが、ミツは色々な場所をこの眼で見て、自分の世界を広げたいと思っている。この村に来て、そろそろ二週間。
どうしようかと、彼は考えていた。
せめてもう少しと、思っているのかも知れない。ここよりも南で流行している性質の悪い病の噂は、ミツも聞いている。
子供達には気付かれないように、彼は溜め息を吐き出した。
病の風は、帝都に辿り着く事無く息絶えるだろう。しかし、この村へは来るかも知れない。
都の充実した医療設備と、医師一人いないこの村の状況を鑑みて、ミツは頭を振った。だからこそ、旅をしているのだ。自分も、自分と一緒に来てくれる少女も。
そう言えばと、ふとミツは顔を上げた。
「誰か、イチを見なかったか？」
「イチお姉ちゃん？」
「知らないよ」
「知らないよ」
「ごめんね、ミツお兄ちゃん」
「うん、大丈夫だよ」
一斉に声を上げる子供達に、ミツは笑って首を振った。そうは言ったが、彼女が出てからそろそろ二時間。この狭い村で、何をしていると言うのか、あのお惚け少女は。
動かない右手に苦労しながら道具を片付けていると、壮年の男性が家へと入って来た。
「よう、ミツ君」
「こんにちは。どうしたんですか？」
「いやぁ、昨日飲み過ぎちまってよ」
ハハハ、と男が照れたように笑う。それに嫌味の無い笑顔を返して、ミツは二日酔いに効く薬を用意しようと席を立った。その彼に、男はふと思い出したように言う。
「ミツ君」
「はい？」
「そう言や、さっきイチちゃんが泉の近くを歩いてたぜ。何してんだ？」
「あぁ、そうですか、泉……泉？」
偶然にも欲しかった情報が手に入って、後で探しに行こうと思ったミツはしかし、不穏な言葉に動きを止めた。
ミツの心情を察したのだろう。男も心配そうな顔になる。
「確か、泉の辺りって……」

「最近、性質の悪い奴等が入って来てるって噂だな。薬草でも探してんのかと思って声掛けるか迷ってる内に、見失っちまって……」
　酔いもあって、思い出すのが遅れたのだろう。面目無いと肩を落とす男に、ミツは気にするなと首を振った。
「最近は物騒でいかん。全く、これだから余所モンは……」
　いつの間にか家の中でのんびりと茶を飲んでいた長老に、いや俺達も一応『余所モン』ですけどと言いかけて、そんな事をしている場合じゃないと彼は慌てて立ち上がった。
「何してんだ、イチ！」
「イチお姉ちゃんが危ない？」
「僕達が迎えに行こうか？」
「いや、良いよ……」
　幼い子供達の百パーセント善意な言葉に顔を引き攣らせて返してから、ミツはふと思い出して手で顔を覆った。
　あぁ、そうだ。あの泉の近くには、切り傷に効く薬草が生えている。
　右手を見下ろして、溜め息を吐く。考えて、幾つかの小瓶を袋に詰め込んだ。
「オジさん、二日酔いの薬はそこの土棚の二番目の青い瓶だから！　少し飲めばすぐ効くよ」
「おう、ありがとよミツ君！　後で芋持って来てやる！」
「有り難う！」
　また食材が増えたと思いながら、ミツはそれに構う暇もなく慌てて駆け出した。

　その頃、旅の相方に心配されている事など全く知らないイチはと言えば、この村唯一の泉の畔をのんびりと歩いていた。
　先程から探している薬草は、まだ見付かっていなかった。季節は春の始め、丁度生え始める頃だと思うのだが。
　そんな事を考えながら、また右足を踏み出す。足の下に細かな石があって、その感覚が幼い頃から都の近くで過ごしていた彼女には未だに新鮮だ。
　軽やかな動きに合わせて揺れる髪は淡い葡萄の色をしているが、木漏れ日が当たると銀にも見える。それは街中で人目を惹くには充分だったが、生憎本人はそれを理解していなかった。
　泉の中には、水棲の生物が息衝いている。見える範囲にいるのは少なくても、その奥にはまだまだ、イチの知らない世界があるのだ。
　その事が、イチにはどうしようもなく嬉しかった。
　立ち止まり、少し考えて淵に座る。ミツに貰ったワンピースの裾が、ふわりと広がった。
　靴を脱いでのんびりと足に水を浸けると、彼女はほうと、全身から力を抜いた。
　水は心地良い冷たさだった。これから夏になれば、この場所は子供達の歓声で満たされるに違いない。
　この村に来て、そろそろ二週間。今までの事から考えると、ミツが場所を変えると言い出す頃だ。
　我侭を言って、夏本番になったらまたこの村に来ようか。
　ミツは村人達に好かれている。きっと、皆喜ぶだろう。
　考えて、イチは顔を綻ばせた。後ろで土を踏む気配がした気がして、イチは振り返る。
「どちら様？」
「おっと」
「ごめんな、驚かせたか」
　前触れも無く振り返った少女に少々驚いた顔をしているのは、数人の男だった。全員鍛えられた体をしている。
　イチは瞬いた。
「どちら様で御座いましょう？」
「いや、旅のモンなんだけど、この辺に村があるって聞いてな。迷っちまったんだ」
「まぁ……」
　泉から人家までは、それなりの距離がある。
「旅の方？」
「あぁ、旅芸者って奴だ」
「こんな所までいらっしゃるのね」
　凄いわ。
　余所者のイチが言うのも筋違いだろうが、この村はお世辞にも住人が多く、発展しているとは言い難い。言わば辺境の村にまで、良くぞ足を運んだものだ。
　頬を染めて素直に感心するイチに、男達は照れたようにそれぞれ頬を染めた。それに微笑んで

、彼女は立ち上がる。
　手拭いで足の水滴を拭き取って、再び靴を履いた。初春の風を体に受けながら、無防備に男に背中を向ける。
「こちらです」
　仕方無い、薬草探しは後に回そう。そんな事を考えたイチはしかし、男達が沈黙しているのを訝しんで振り返った。
「悪いな、嬢ちゃん」
「えーー」
　イチは瞬いた。
　男の一人が、彼女の肩を掴んで引き寄せる。握った拳を、イチの腹部に叩き込もうとし、ーーその寸前で、男は崩れ落ちた。
「まぁ……」
　少女はそんな男を、きょとんとした顔で見下ろした。一瞬事態を把握出来なかった男達が呆然と立ち尽くしている内に、彼等も矢張り次々と倒れ伏す。
　彼女の鼻腔を擽ったのは、甘くて優しい匂いだった。
「ミツ？」
「イチ……」
　黒い髪に、黒い瞳。見慣れた顔を認めて、少女はゆっくりと瞬く。
「何をしていらっしゃるの？　こんな所で」
「それは俺の台詞だよ、イチ」
　小瓶の蓋を丁寧に閉めながら、ミツは体全体で息を吐き出した。心臓に悪い場面を見て仕舞った。
　保険を持って来て良かったと、彼は手の中の小瓶を見下ろした。これは即効性の眠り薬で、幼い頃から少しずつ薬物に耐性を付けたミツとイチには効果の無いものだ。
「わたくしは、薬草を……」
「うん、俺の為だろ？　有り難う、イチ。でも、一人であんまり遠くに出掛けたりしないようにな」
「子供ではありませんわ。貴方とわたくしは、二、三しか年は違いませんもの」
「……」
　ミツは沈黙した。彼女は何も判っていない。
「まぁ、良いけどな……」
　俺が守れば。
　呟いて、ミツは少女に手を差し出した。
「帰ろう？　今日の夕飯は豪華だよ」
「はい」
　嬉しそうに言って、ミツの手を握る。そっと安堵の息を吐き出して、彼は痛むこめかみを押さえた。
　いつになったらこの少女は、他人を疑うという事を覚えるのだろう。

「ミツ」
「うん？」
「夏の半ばに、またこの村に来ましょう？」
　彼女の台詞に驚いて、ミツは瞬いた。彼女が願いを口にするのは極めて珍しい。
　珍しいからこそ、叶えてやりたい。他の場所も色々と見て、時期に合わせて来訪出来るようにすれば良いだろうか。その時はまた、今使っている空き家を使わせて貰おう。
「理由を訊いても？」
「泉が涼しいのです」
「……」
　うぅん、とミツは内心で呻いた。惜しい。確かに理由を言っているが、それだけでは少し判り難い。
　彼女の事だから、泉で遊ぶ子供達でも想像したのだろうが、と考える。そしてそれは、事実その通りな訳だが。
「判った。じゃあ、そうしようか」
「有り難う御座います、ミツ」
　頬を染めて、イチは言った。無邪気に慕って来る様子は妹のようで、ミツとしては非常に複雑だ。
　ふわり、と風に煽られてワンピースが広がった。それは今よりも少し小さい頃に帝都でミツが買ってやったもので、その当時には少々大きくて着れなかったものだ。
　親から貰った小遣いをちまちま貯めて買った過去を思い出し、ミツはこっそりと笑った。今ならば或る程度自由に買ってやれるのだが、イチは基本的に物を欲しがるという事がない。
「イチ」
「はい？」
「行けるだけ南に行って、夏にここを通ったらそのままお母さん達に会いに行こうか。帝都で新しい服も買おう」
「あぁ、そうですわね。……楽しみです」
　欲しがらないが、欲しくない訳ではないのだ。それを判っているミツは、彼女の笑顔に同じように微笑んだ。
　いつの間にかミツよりも先に立って、軽やかな足取りで歩いていたイチは、ふと思い出したように少年を振り返った。
「ミツ」
「うん？　何？」
「何故、先程のお方達を眠らせましたの？」
「……遅いよ、イチ……」
　自分が安心してイチを一人で出掛けさせられる日は、まだまだ遠い未来の事らしい。それとも一生来ないのかも知れない。そんな事を思って、ミツは苦笑した。

す、と息を吸い込んだ。そうして、ゆっくりと彼女は笑みを浮かべる。
夏の匂いだ。
夏の、太陽の匂い。
あの泉で過ごしている子供達の姿を、そしてそれを眺める自分達の姿を瞼の裏に思い描いて、笑む。
「あぁーー」
嘆息して、しかし、彼女はすぐに違和感に気付いた。
寒い。
こんなにも遠慮の無い、いっそ傲慢な日差しが、地を照らしているというのに。
あまりにも鮮やかな、夏の花の匂いが充満しているというのに。
「寒い……？」
彼女は、イチは、そう言って己の肌を擦った。
自分の姿を見下ろす。それはずっと見慣れているお気に入りのワンピースで、少し昔に、ミツから貰ったものだった。
春を謳うような、淡い色の。
空を見上げる。空は、手を伸ばせば届きそうな程に近かった。これは夏の空だと、少女は思う。
不意に、イチの感覚に何かが引っ掛かった。
「ーーー」
何か判らず、ただ動きを止めて、神経を研ぎ澄ます。暫し無言になる。気の所為か、木々の音も風の音も止んだ。
寂。
静かな森だ。森に、そこだけぽっかりと空いた、草原のようだった。
音は、聞こえない。
向こうに木陰がある。
あまりにも寒いだろうと、そんな連想をした。
こんなにも日差しが強いのに。
あまりにも。
ふと思い付いて、彼女は自分の足下を見下ろした。そして、先程と同じように顔を綻ばせる。
淡い色の花が、咲いている。
数え切れない花弁を持つそれは、イチの好きな植物の一つだった。
名前は、何だっただろう。
遠い昔に、聞いた事がある気がするけれど、もう忘れて仕舞っていた。
この花の周りでは、よく虫が飛んでいるのを見掛ける。
名前は、何だっただろう。
忘れているというその事実に、何故かとても損をした気分になって、イチはこっそりと嘆息した。隠したい相手も、誰も、ここにはいないのだが。

　呼ぶ名前は、一つしか持っていなかった。
「ミツ」
　騒。
「ーーー」
　また、だ。まただと思って、イチは動きを止めた。また、引っ掛かる。聞こえる。そう、これは、ーー呼ばれているのだ。
　誰に？
　生憎、イチは、その誰かに心当たりが無かった。
　呼ばれている。
　少女は振り返った。殆ど直感だった。
「こんにちはァ」
　イチは息を吐き出す。
　そうして、安堵した。
　あぁ、ーー夢だ。
「お嬢サン」
　夢だと、思った。夏の匂いも、冬の空気も、春の花すら。
　イチは知っている。イチには判る。
　直感が告げている。

　こんな人間が、存在する筈はない。

　だからこれは、夢だ。
「こんにちは」
　そう思って、イチは相手と同じように挨拶を返した。相手ーー若い男だーーは、それに満足したように笑む。
「私は、誰だと思いマス？　お嬢サン」
　判らない、と。
　彼女は答えようとした。その時、偶然にも、彼と眼が合った。
　否。最初から、この男はイチの事しか見ていない。初めて、眼が合っているという事を認識した。そう言った方が、正しいか。
　彼女ははっきりと錯覚する。
「魔術師」
　何も、考えてはいなかった。
　相手は、男は、魔術師は、満足そうに、何の不足も無いと言いたげに、ただ嗤う。
「えぇ、そうーーそうデス、貴女が言うのならば」
　それが正解！
　呵々と、嗤う。
　男の瞳が黒とは違う色をしている事に、イチはそこで気付いた。

黒、ではない。
それは、淀んだ、永い間、そう――気が遠くなるくらい昔から、変化を放棄して仕舞った、凝った流れの中に沈んだ、苔の色だった。
瞳は、こちらを捉えて放さない。
イチは息を吸い込んだ。
「何のご用がおありですの？」
彼女には珍しいとも言える強い語調の質問にも、魔術師は当然のように動じなかった。
「ご機嫌麗しゅう」
大仰な一礼。
馬鹿にされているようだった。そう思って、すぐに否定する。
彼はイチを馬鹿にしてなどいない。
彼にとって、イチは、馬鹿にするだけの価値も無いのだろう。
それが、判った。判って仕舞った。だからその次に感じたのは、怒りではなく悲しみと憐れみだった。
哀しみ。
哀れみ。
子供のようだ。そう考えて、眼を伏せる。
「君がレイの双子ですネ？」
「……レイ？」
聞き覚えの無い名前に、イチは眉を寄せる。
「どなた様で御座いましょう？」
「初めまして、イチ」
一方的に、魔術師は微笑んだ。
相手はイチの反応に興味が無い。イチに興味が無い。何しろこれは。
夢だ。
「判らない。……判りませんわ」
「良いのですヨ、イチ」
いつの間に、名前を。
美貌。
澱んだ苔の色の瞳。
檻。
夏の匂い。
冬の空気。
春の花。
嘆息。
「何故、私をお呼びに？」
「また、会うかも知れませン。会わないかも知れませんけどネ」

魔術師はそう言った。
夢だ。
イチははっきりと、これ以上なく確実に、その事を認識する。
「お休みなさい、レイの双子、サン」
眠い。
考えて、愕然とする。これは夢だ。今自分は、眠っている筈なのに。
相手の微笑。
魔術師の嘲笑。

起きた時には、全てを忘れていた。

ぱた、と。
ふと落とした視線の先に、落ちたものが何であるのか、ミツは暫し考えなければならなかった。
結局答えは見付からずに、顔を上げる。
そして驚いた。
「イチ!?」
「はい？」
呼ばれて、少女は、きょとんとして首を傾げた。その眦から、再び涙が滑り落ちる。
ほろほろと、はらはらと。
自分が泣いているとは、彼女は気付いていないらしかった。
「イチ、何で泣いてるの？」
「……？」
案の定、何を言っているのかと言いたげに瞬く。涙が零れる。その感覚に気付いたのか気付かないままなのか、何かを確認するように、イチの細い指が自身の眦を探った。
指を見下ろす。
「あぁ……濡れて、います」
事実をただ口にしただけとでも言うかのようだった。否、実際にそうなのだろう。自分に起きている事として捉えられていないのかも知れない。
「イチ、眠いの？」
そんな彼女を安心させるように、ミツはそう言った。イチはふると首を振る。
「いいえ。いいえ、ただ」
「ただ？」
「……忘れて仕舞いましたわ。何かを思い出したような、気がするのですけれど」
「今日の夢の事？」
今日、ミツの隣で起きた時も、矢張り同じようにイチは泣いていた。
「確証はありません」
「夢は夢だよ」
ミツは言って笑んだ。イチを安心させる為だけに浮かべられた笑みだった。そして、事実その表情は効果を齎す。
「有り難う御座います、ミツ」
指で涙の跡を拭って、イチは言う。
「忘れてはいけなかったような気が致します」
「忘れたものは仕方無い」
「その通りです、ミツ。けれどーー」
そこまで言って、イチは眼を伏せた。これ以上言い募るものではないと考えたのかも知れない。
「あぁ」

「イチ」
「申し訳ありません」
「大丈夫だ。イチが何を考えているのか、何を思っているのか、全て聞いてやる」
　ゆっくりと、幼子に言い聞かせるような口調で言う。今日のイチは、どうしようもなく不安定だった。
　もう暫くは、この村から動かない方が良いかも知れないと、ミツはそう思った。こんな状態で再び旅に戻るのは危険だろう。
　イチに言われて、今日も、先日の泉へと来ていた。幸い、周りには不穏な人影も無い。
　その内消えるだろうと、思った。顔を合わせて判ったが、あれはそんなに筋の通った人間達ではない。近い内に飽きて別の場所に行くだろうと。
　或いは、もう行った後かも知れなかった。
　何をするでもなく、泉の周りを歩く。ただそれだけの事を、イチは気に入っている。
　遠くから、呼ぶ声が聞こえた。
「イチお姉ちゃん、ミツお兄ちゃん！」
「おう、こっちだこっち！」
「皆……？」
「呼んだんだよ。今日は昼をここで食べよう、って」
　不思議そうな顔をしたイチに、悪戯小僧のような顔でミツが言う。それに安堵したように、イチは微笑んだ。
「ミツ」
「うん？」
「有り難う御座います、ミツ」
　頬を染めて言う彼女に、ミツは思わず同じように頬を染める。しかしその意味には気付かずに、イチは笑った。
「もう大丈夫か？」
「はい」
　頷いた通り、少し前までの不安定さが、子供達の顔を見た途端にどこかへ行って仕舞ったようだった。安堵すると同時、村の子供達に僅かばかりの嫉妬もしている子供っぽい自分に苦笑して仕舞う。
「じゃあ、行こうか」
「えぇ」
　食べるものは、子供達が持って来る約束だった。その中には、朝の内にミツが用意したものも含まれている。
　持って来た食べ物を子供達が広げるのを見守りながら、イチはひっそりと口を開く。
「呼ばれたような、気がしたのです」
「イチ？」
「誰かに呼ばれる、そんな夢だったような気が」
「……そっか」

　彼女が夢の話をしたのは、それが最後だった。
　風が吹く。春の風が。
　それがあり得ない湿気を孕んでいるような気がして、ミツは密やかに眉根を寄せる。そして一人、溜め息を吐いた。
　視線の先には、少女がいる。ミツにとって、全てを捧げて守り続けてきたと言っても過言ではない少女。
　光を受ければ白銀にも見える葡萄の色の髪。
　漆黒の瞳。その左側が本来ならば赤色である事を、ミツは知っている。
　白磁器の肌。少し力を加えるだけで折れて仕舞いそうな程に細い四肢。美貌とも相俟って、薄氷のような危うさを持つ美少女。
　足下には、空白。
「ミツ！」
「今行くよ！」
　子供に囲まれたイチに呼ばれて、ミツはそう返した。集まる子供達と同じく集まる影、そしてその中にぽっかりと空いた空白。
　少年は軽く頭を振ると、少女と子供達の方へ駆け出した。

運命を信じた事は無かった。
運命。星宿。そんな言葉を受け入れた、その瞬間に、己の存在が意味を失う事を男は正確に理解していたからだ。
人は一人では生きていけないものだ。だから、何かに縋ろうとする。
それを称して、信仰と呼ぶ。
遠い他国では、それを売り物にする商売もあるという。そう、――宗教、とか呼んだか。
人が生きる理由を、金と引き換えに売るらしい。
それが可笑しな事だとは、男には思えなかった。人が生きるのに縋れるものは必要だろうし、それと同じくらいに金も必要だろうからだ。
互いが合意の上ならば、誰も何も言わない。
実態が何であろうと。
信じた時点で、それは真実でしかあり得ないし、――そして客観的に見た事実というものは、実際には存在なぞしないからだ。何しろ客観的という視点は存在しないので。
それが判る程度には、男は既に時を重ねていた。
重ねている心算だった。
心算になっていた。
この国に、宗教は存在しない。国民が信じ、縋るものは、王ただ一人である。それがこの国なのだ。
だから、王は王足り得ねばならなかった。
全ての国民に、信じ、縋り、頼り、時には詰り糾弾する為の王を与えねばならなかった。
だから、王である男にとって、運命とは存在するものではあり得なかった。
運命を受け入れた瞬間に、男の決断も決意も何もかも、この国の全ての民の決断も決意も何もかも、或いはこの世界の全ての存在の意味の何もかもが崩壊する事を知っていたから。
男は、息を吐き出した。
王都の、街――である。この国の中心にして、男にとって最も近く、そして最も遠い場所。
今、男が王であるなどと気付く者はいないだろう。いつも通りの喧噪の中を、歩く。
守るべきものだ。
愛すべきものか否かは関係無く。
男は苦笑した。
「――――――し！」
彼の耳にそんな声が届いたのは、そんな、普段と変わらぬ街を眺めている時だった。
人々の視線が、自然と騒ぎの中心に集まっている。その視線を追って、男は一人の女性を確認した。
「放して下さいまし！」
「何だよ、良いだろ、姉ちゃん」
「そうそう、暇そうだったし――」
「……」

男は重く嘆息した。
王都は治安が良い。だから、あんな人間達も、そうそういない筈なのだが――否、そんなに危険ではないのかと、王は考え直した。若い者が強がりたいだけで、それはよくある事だからだ。
尤も、囲まれている女性にしてみれば迷惑極まりない事だろうが。
さてどうしようかと、男は思案する。目立つのは本意ではないし、本当に危なそうならば誰かが助けに入るだろう。
そんな事を暢気に考えていた彼は、しかし、その後の光景の違和感に眼を眇めた。
「放して頂きたいと――申し上げておりますでしょう？」
一瞬。
一瞬、だ。
女の腕を掴んでいた男の体が、冗談のようにくるりと回転して、地面に叩き付けられた。女が逆に男の腕を掴んで、投げ飛ばしたのだ。
男の仲間が、ぎょっと眼を瞠る。周囲でそれを眺めていた人々は、一瞬しんと静まりかえり、そして次の瞬間、爆発的に笑い出した。
「良いぞぉ、姉ちゃん！」
「強っえぇなぁ、おい！」
「格好良い！」
多くの人々からやんやと褒めそやされた女は、集まる視線をものともせず、男達を睥睨した。
「お次はどなた？」
自分が投げ飛ばした男を全く顧みずにそう問うた女に、二人の男の顔が一様に引き攣った。
「い、嫌だなぁ、そいつがちょっと遊ぼうっつっただけで……なぁ？」
「そうそう。俺達忙しいし？」
「そうですの」
しどろもどろになる若者達を、女は睥睨し――そしてその数秒後には、嘘のように優しげな笑みを浮かべて見せた。
「それは、宜しゅう御座いますこと。一日にそう何人も投げ飛ばしますのは、疲れますもの」
「強いんだな、姉ちゃん」
「鍛えておりますのよ。舐められては困りますわ」
うっかりとそう返した若者にそう答えて、女は寛容に男達を許した。詰まらなそうな声が、観衆から僅かに上がる。
そこで漸く女ははっと辺りを見回し、自分が衆目の的になっている事に気付くと、かぁっと顔を赤らめた。
「ま、まぁ……私とした事が、はしたない事を致しました」
「いや、凄かったぜ！」
「また見せてくれ！」
野次を飛ばされて、女は苦みの混ざった愛想笑いを浮かべた。足下に置かれていた荷物を手に取って、そそくさとその場を離れる。
王は、その群がりから更に離れた所で、それを眺めていた。疑問は確信になりつつある。

次代を担う者として、男は幼少の頃から様々な教養を叩き込まれていた。体術もその内の一つである。
だからこそ、判った。
若者を投げ飛ばした瞬間の、女の動き。あれは、修練を積んだ人間の動きではない。無論、力任せに投げ飛ばしているのとも違う。
あれは、間違い無く。
他の誰が気付いていなくとも。
不自然――だった。
無論、男は、体術を身に着けているとは言ってもその道を極めている訳ではない。
しかし、同時に男は、己の観察力に何よりの自信を持っていた。
気分の高揚した人々から何とか逃れた女は、漸く落ち着きを取り戻してこちらへと向かって来ている。その偶然に、男は感謝した。
頃合を見計らって、ゆっくりと。
彼は、拍手をした。
手を打ち鳴らす音に、女が気付く。顔を上げて、眼が合う。その瞳に、男はひっそりと息を飲んだ。
深い、紅の瞳。
透けそうな程に白い肌を彩るのは、同じくらいに深い紫紺の色の髪だ。
さらりと、傾けられた首に合わせて長髪が揺れる。
「……見られて仕舞いましたか」
「えぇ、素晴らしかったですよ、お嬢さん」
「お止め下さいまし。そのように呼ばれる程、若くありませんわ」
恥ずかしそうに頬を染めて、女は笑った。男も優しく笑う。
「私とした事が、あまりにも勇ましく美しき淑女に、心を奪われたようなのです。お付き合い願いませぬか？」
思いも寄らぬ言葉だったのだろう、女が瞬く。ゆったりとした動きに、男は根気強く沈黙を守った。
「私、ですか……。えぇ」
考えた末、彼女は結論を出したようだった。頷き、笑う。
花が咲いたようだと、男はそう思った。
「こんな私に声を掛ける紳士に、私も興味が湧いたようで御座いますわ。貴方様のお時間の許す限り」
「光栄です」
男は一礼する。
「お名前を伺っても？」
「レツと申します。貴方は？」
疑いを知らない瞳で、女は答えた。男は答える為に口を開く。彼はそのレツに、

ーー嘘を、吐いた。

「ーーカイと」
「カイ。素敵な名前……」
「おや。私が言おうとしておりました事を」
彼は微笑した。ほんの数瞬、眼を伏せる。
瞼の裏に、見える光景がある。
冬に、花が咲いていた。狂ったように。
実際狂っていたのかも知れない。
遠過ぎて、判らない。
彼が口にしたのは、男がまだ小さかった頃に出会った、一人の青年の名前だった。

　運命を信じた事は無かった。
　運命とは即ち神を否定する言葉であると、レツはそう思っていたからだ。
　運命が神に囚われているのならば、神は必要無い。
　もしもその逆ならば、運命は必要無い。
　そして結局は、そのどちらも必要無いものではないか。
　自分達人間にとっては。
　いるも、いないも。
「同じ事」
　呟いて、レツは微笑んだ。
　神は眠り続けている。未来永劫。地球上の全ての生物が死に絶える、その瞬間まで。或いは宇宙の全てが存在を消し去る、その瞬間まで。
　ひらりと落ちてきた、雪を掴んだ。
「……何をしているんだ？　レツ」
　何かを掴む動作をした事に気付いたのだろう、カイがそう問うて首を傾げた。悪戯が見付かった子供のように肩を竦めて、彼女は笑う。
「雪を、掴んでおりましたの」
「雪？」
　カイは笑った。カイはレツの言葉を、彼女一流のジョークと捉えたようだった。
「もうすぐ、夏だよ。レツ」
「えぇ、その通り。全てを灼く季節ですわ。傲慢なものが、最も力を強める季節です」
　あれから、二人は逢瀬を重ねていた。
　カイの口調が砕けたものに変わったのに対して、レツの受け答えは変わらなかった。彼は少しだけ物足りないような顔をしていたが、レツが誰に対してもその言葉遣いなのを知ると、その表情も消えた。
　数度目にして、レツは、自分がカイに惹かれている事を認めた。
　想いを通じ合わせたのは、その少し後。
「あぁ……」
　幸せだ。そう思った。仮令錯覚でも構いはすまいと思う、その程度には。
　レツは笑う。彼女は笑う。恍惚と。
　雲が流れていく。地上の喧噪など素知らぬげに。
　西へ向かう風。
「レツ」
「何で御座いましょう、カイ？」
　ゆったりと、レツは返した。穏やかな心地でいるのを感じる。それは生を受けて以来覚えの無い事だった。自分の気性を、彼女は理解していたからだ。
「夏になったら、西の湖に行こうか」
　きっと涼しい。

　魚が泳いでいるだろう。
　鳥だって見られる。
　虫の音も聞けるかも知れない。
　王都の西にある湖は、冗談のように美しい場所なのだ。
　何かの間違いのように。
　それを、彼も彼女も知っていた。
「素敵ですわね」
　素敵、とレツは繰り返し呟いた。
　あの雲を追って。
　無責任な風を追って行けたら、どれ程幸せだろうかと。
　花が綻ぶような笑みを見せたレツに、カイも満足したようだった。少しだけ照れたように笑って、緩く拳を握った手を近付けて来る。
　小指だけ立てたその手が何を意味するのか、レツは知っていた。
「約束、ね」
　子供騙しの、遊びに似た約束。小指を絡ませて、二人は眼を合わせた。
　嘲る声を聞いた、それが何なのか、レツには判る。自分自身の声だった。
　自らを嗤うように、レツは囁く。
　唐突に。
　死か愛か、或いはそれに似た何かのように。
「運命って信じられますか、カイ？」
「ーーーー」
　青年は、不意打ちを食らったように、きょとんとして瞬いた。それが可愛らしいとすら思える表情だったから、レツは笑う。
　流石に唐突過ぎただろうか。そう思って、否と自分で否定する。
　案の定、彼はすぐに反応を返してくれた。
「僕がそれを信じた事は無いし、多分これからも無いだろうね」
「一生？」
「一生」
　ゆっくりと、言葉を咀嚼して頷くカイに、レツは微笑した。
　幸せだと、そう思う。
　夢幻ならばと、そんな事を考えて仕舞う程度には。
「奇遇ですね」
　彼女は首を傾けた。
「私もそう思っておりますの」
　その答えに、カイも満足したようだった。

　そうして、場面は変わる。

　ーー夏、だった。

　生まれてから幾度目かの夏であったかも知れないし、生まれて初めての夏であったのかも知れなかった。そんな事は、彼女にとって瑣末な問題だった。
　レツは、自分が上機嫌である事を自覚していた。恋人から貰った品の良い首飾りを手に取って、これに合わせる服は何が良いだろうかと思案する。
　紫紺の長髪を纏め上げて、銀の結紐で縛る。余った紐の部分はそのまま流した。
　眼の前には、鏡がある。世界で一番の正直者で、そして嘘しか映さない道具だ。
　自分の姿を確認し終わってから、鏡の縁の装飾を何とは無しに指でなぞる。既に誰に使われてきたかも判らない程に古いものだ。新しいものよりも余程良い。
　次いで表面に指を滑らせて、一つ息を吐き出すーーその瞬間、指先が違和感を訴えて、レツは我に返った。
「……え？」
　気の、所為か。
　指先で触れているものーー鏡の表面が、波打った、ような。
「ーーーー」
　彼女は、顔を顰めた。
　レツは魔術師だ。そして魔術師の周りにおいては、世界の法則は意味をなさない。
　それは、魔術師の力が強ければ強い程顕著になる。例えば、夏に降る雪。砂漠に広がる雨雲。春に香る枯れ草の匂い。
　彼女は己の力を過信しない。自身の力がそんなに強くはない事を、理解していた。
「珍しい……」
　呟いて、ゆっくりと、鏡の表面を撫でる。こんなにあからさまな事は、珍しいと言えるだろう。
　険しい表情のまま、鏡から離れる。嫌な予感が、頭から離れなかった。
　鏡は嘘だ。嘘しか映さない。そして、この世には嘘しかあり得ない。鏡に映る世界は、確かに真実だった。
　それが、波打った。
　波は違和だ。違和は影響だ。影響は歪みだ。歪みはどこまでも広がって、そう、小石一つ転がすか否かで、世界は変わる。こんな風に。
　世界は出来上がっている。
　だからこそ、レツは運命を信じないのだから。
　鏡に映るのは、いつだって歪な世界だった。
　歪んでいる。
　歪んでいるものは綺麗だと、そんな事を思った。

　人間が歪んでいるからかも知れない。
　歪んでいないものこそ、あり得ないからかも知れない。
　その考えは、或る種の保身でもあったのだろうが。
　レツは軽く頭を振って、余計な思考を追い出した。
「折角、カイと食事ですのに」
　ぽつり、と呟いて、己が呟きを落とした事に気付いて苦笑する。
　今日は外で食事をした後、カイをこの家に招く心算だった。先日会った時に、彼がふと気になると漏らしたからだ。
　少しだけ、いつもよりも贅沢をしよう。
　彼女はそう決めている。まるで十代の乙女のようだと、そんな事を思った。
　窓際には、花を活けてあった。数日前までは美しかった花は、この気候の所為ですぐに萎れて仕舞っていた。
　数秒間考えて、花に手を伸ばす。
　小振りな、黄色い花弁の花だった。小振りと言ってもそれは普通の花にしては充分に大きい。単に、同じような花でもっと大きな種類があるからそう見えるだけだ。
　愛おしむように、慈しむように、右手で軽く花弁の数枚を撫でる。手を離した時には既に、花は数日前の状態に戻っていた。
「この程度は、許して下さいまし」
　悪戯に花に命を与えて仕舞った事を誰にとも無く詫びると、レツはふわりと身を翻した。

　約束をした王都の広場には、既にカイの姿があった。
　見付けて、口許を綻ばせる。どんなに多くの人間達に囲まれていても、彼を見落とす事は無いだろう。
「カイ」
　呼び掛けると、青年が振り返る。淡い葡萄の色の髪は、光を弾いて銀にも見えた。
「お早う、レツ」
「お待たせ致しましたわ」
「今来たばかりだよ」
　言って、カイは微笑んだ。
　レツも同じ笑みを返して、並んで歩き出す。ただそれだけの事が、歌い出したくなる程に嬉しい。
「近くに、川があったよね」
「行かれますか？」
「少し歩こうか」
　彼の提案に、レツは頷いた。水辺というのは、それだけで涼しいものだ。
　健康的な色合いの肌には、薄らと汗が浮かんでいるようだった。そんな事を思っているレツも、暑い事には変わりないが、待たせて仕舞った事に対する罪悪感があった。

「以前」
「ん？」
　ふと思い出して、彼女は口を開く。柔らかな表情を浮かべて、男はレツを見下ろしている。
「湖に、行こうと」
「言ったね。いつにしようか？」
　暫くは晴れ間が続くそうだから、天気の心配は必要無いね。あぁでも、そろそろ降ってくれないと、生活に支障が出るかも知れない。
　声に僅かな憂いを混ぜたカイに、レツは緩く首を振った。
「心配の必要は御座いませんわ」
　近い内に、雨が降るだろう。
　恵みの雨が。
　時に災いとなり諸々の命を奪う雨は、それでも確かに彼等を生かしている。
　長くなるだろうと、思った。だから、降り出す前に行くのが良いかも知れない。
　レツは眼を細めて、鼻から息を吸い込んだ。鼻腔を擽る、薄い酸の匂い。
「では、明日はどうでしょう？」
「明日？」
　あまりにも唐突な提案に、カイは苦笑したようだった。それでも逡巡せずに、彼女に頷いて見せる。
「それは、また……随分と急だね。でも、良いよ。行きたいんだろう？　僕も行きたかったし」
　本当は、ね。
　いつ言い出そうかと、迷っていたんだ。
　先に言われて仕舞ったけれど。
　その返答に、レツは満足して微笑んだ。
　道は、緩やかな傾斜となっている。所々欠けた石畳を踏みながら歩いていると、上の方から悲鳴が聞こえてきた。
「……？」
　顔を見合わせ、首を傾ける。視線を正面に戻すと、坂を転がり落ちてくる台車が眼に入った。
　硬直したレツに、カイが手を伸ばす。
「危ない！」
　叫んで、彼女を引き寄せて腕に閉じ込めた。衝撃を覚悟して固くなる青年の腕に守られながら、レツが息を吐き出す。
　台車の片輪が、唐突に外れた。
「きゃああぁ！」
　二人に向かってまっすぐに走っていた車は、悲鳴を上げた女性よりもやや離れた場所の、家屋の壁に突っ込んで止まった。
　驚いたのだろう、突っ込まれた家から老夫婦が飛び出して来る。怪我人はいないようだった。
「……あぁ、驚きましたわね」

　そう言って、レツは胸に手を当てた。カイもほっと力を抜く。
「本当に。――でも、運が良かった」
　進路を変えた台車が他の誰かに当たっていたら、それも大惨事になっていただろうから。
　考えて、カイは力無く首を振った。はたと思い出し、慌ててレツから身を離す。
「済まない、失礼だったかな」
「いえ。有り難う御座いました」
　ふわりと、彼女は笑った。春に咲き綻ぶ花のような笑みだった。実際に春の匂いを嗅いだ気がして、カイも微笑する。
「怪我が無くて良かった」
「カイも。私を庇おうとなさるなんて……」
「当然の事だよ」
　言って彼は、少し強引にレツの手を握った。か細い彼女の右手は、僅かに震えている。
　愛しい女を安心させるように、カイは、今度は意識して彼女の体を抱き寄せた。

魔女は運命を信じていなかった。
運命とは単なる後付けであると、彼女は知っていたからだ。
運命とは何の意味も無いものである事を、彼女は判っていたからだ。
運命とは神の上位に位置するという事を、彼女は察していたからだ。
神よりも上があるならば、神を信仰する人間はどうすれば良いのだろう。
運命を信仰しろというのか。
自らの、救いのない運命そのものを。
定めを。
人は信仰を持たねば生きてはゆけぬ生き物だ。ならばそれは。
あまりにも哀れに過ぎるではないか。
そう思う程度には、魔女は人を愛していた。
神などもう、どこにも無い。
「死に絶えて、久しい」
ぼそりと、彼女は呟いた。呟いたそれは周囲の僅かな空気を震わせただけで、部屋に響く事は無かった。
彼女は人を愛していた。
彼女は世界を愛していた。
彼女は生を愛していた。
そうして彼女は、一人の男に恋をした。
愛は与えるだけだ。それだけで満足出来る。一方的な欺瞞。偽善。虚飾。無為。それこそが愛だ。この世で最も美しいものだ。
恋は与えるだけのものではない。その本質は寧ろ奪うものだろう。それはかつて世界の誰かが言った言葉で、魔女はそれを知識として知っているだけだった。
こんな風に思い知る破目になるとは。
全く、自分の未熟さ加減には笑いすら浮かんで仕舞う。
彼女はそう思った。そう思って、声を立てて笑った。恍惚と、魔女は虚空を見据えて笑みを浮かべる。
「愛していますわ、カイ」

その時まで確かに、魔女は幸福の中にまどろんでいた。
幼児のように。否、嬰児のように。
泥濘のような温かさの中に。
彼女は買い物に行く途中、見慣れた顔を見付けて顔を綻ばせた。それは半年前には知らなかった顔で、そして今では知らなかった時の事を考えられないくらいに自分の中で存在感を増している男のものだ。
「カーー」

　魔女はいつものように、ゆったりとした、優しい声で彼の名を呼ぼうとした。しかしその言葉は、すぐに途切れる。
　何故だろう。
　彼のあんなに険しい顔など、見た事が無かった。
　男は、一人の男と共にいた。服装は周りの人間と何も変わらないが、仕種や視線の動きで判る。彼は軍隊従事者だ。
　兵士か。
　自分の中で浮かんだ意見を却下する。一兵卒などではあり得ない。
　何者だ。
　何故、彼と。
　ただの友人と言うには、男の顔は穏やかさに欠けていた。
　魔女は眼を閉じた。魔女の中には、ただ、迷いがあった。
　決意は無かった。
　決意が無いままに、魔女は二人の会話の音を『拾った』。彼女には、その力があった。
「ーー本当ですか」
「あぁ。間違いない」
　最初の言葉が謎の男で、それに答えたのが魔女の恋人だった。
　彼女はそっと息を吐き出した。そして、彼等の言葉に意識を向けた。
「魔女ーー魔術師だよ、あの女は」
　レツ。
　あの女、と言った後、彼は確かに、その名前を口にした。
　魔女は動きを止めた。顔が強張る。自分が話題になっているとは、思いもしなかった。
　駄目だ。
　嫌な予感がする。
　それは、女の勘ですらなかった。
「存在するとはーー」
「古くから、あぁいうのは何でもない顔をして紛れ込んでいるんだ。ーー昔、本物に会った事がある。丁度今の私くらいの歳だったか」
　その言葉を聞きながらも、相手は半信半疑のままだった。微妙な表情で固まったままの男に、彼が肩を竦める。
「無理に信じる必要は無い」
「はーーその、何分、浅学なもので。存じ上げませんでした」
　男は、今にも敬礼でもしそうな様子だった。魔女の胸に、ふと疑問が浮かぶ。
　あぁ、そうだ。
　そう言えば。
　私は、彼の職業を知らなかったーー。
　確かに、彼の動きは鍛えられた男のものだったが。実践向きではなく、護身術程度に止められていた。

　だから、何らかの経験はあるのだろうと、踏んでいたのだが。
　しかし、そんな考え事をしていた彼女の頭は、次の瞬間全ての問題が吹き飛んで真っ白になった。
　彼の、声で。
　言葉で。
「あれは本物だよ。何度か、使う所を見たな。魔女の方は、気付かれていないと思っているようだが。――そもそも、最初に声を掛けたのは、それに気付いたからだったんだ」
「そう……なのでありますか？」
　彼は鷹揚に頷いた。
　魔女の恋人である、男は。
「落とせば」
　囁く。声を落として。
　魔女の大好きな、声で。
　どんなに声量を落としても、魔女には聞こえて仕舞うのだ。
　魔女は――。
　彼女は、力の発動を止めはしなかった。
「上手く、使えるだろう？」
「――――」
　喉が、勝手に引き攣った声を上げた。
　よろめいて、無意識の内に後ろに下がる。足が引っ掛かって、棚の上の荷物が盛大に転がった。
「ちょっと、姉ちゃん！　何してんだ！」
「あ……」
　魔女には答える余裕が無い。
　何故なら、騒ぎに気付いた、彼が。
　彼女の恋人が。
　カイが。
　こちらを、振り返って。

　眼が、合った。

「レ――」
「！」
　弾かれたように、魔女は走り出した。幾つかの怒号と、たった一つの追い縋る声。弾む呼吸、熱くなる体。
　そのたった一つが、彼女を揺るがせる。
　初めから自分の力が目的だったのかと思うと、浮かれていた自分が情けなくて涙が流れた。あ

ぁこんな事で泣くなんて馬鹿みたいだと、思って、けれど。
「私は、確かに――」
　貴方が好きだったのに。

　この部屋は世界から隔絶されている。
　魔女は、薄らと笑った。
　世界は隔絶している。世界は完結している。世界は終幕している。
　そうやって、この世界は生きていく。
　彼女は眼を閉じた。そうして祈るように、言葉を紡ぐ。
「愛しています、カイ」
　彼女は既に知っている。それが、当代の王である男が魔女に向けて名乗った偽りの名である事を。
　だが、それでも。彼女にとってその男は、カイ以外の何者にもなりはしないのだった。

魔女は、忽然と姿を消した。
王はあの後、行った事のある彼女の家へと向かった。しかし、それが見付からなかった。
確かに、記憶にある。
家の内装。
外の景色。
そこに至る為の、道順まで。
王は、自らの中にある記憶に従って歩いた。だが、何度やり直しても、あの、レツという名の女の家に辿り着く事は出来なかった。
家だけが、不自然に消滅したのですらない。それならまだ判り易かった。
覚えている、あの景色と、似ているようで違う景色ばかりが眼に入って、かと思えば同じかと錯覚し、また違う空間に行き着く。あの一帯の空間だけが、捻られでもしたかのようだと彼は思った。
何度も行った。
何度も。
そしてその一度として、王は魔女に会う事は叶わなかった。
「起きておられますか、陛下」
「――何だ」
耳に馴染んだ部下の声に、男は我に返った。そして自嘲する。今、命を狙われれば、恐らく自分は死んでいただろう。
「――様が、ご懐妊なされたと」
入って来た男に第一王妃の名を告げられて、王は瞠目した。
「……そうか――！」
これから、戦が起こるだろうと、王は思った。
それは、民草の与り知らぬ所で進められる、実に人間らしく実に醜い戦だ。
王の跡目争いという戦。その子供は、何歳まで生きられるだろうか。この国では王位の継承に男女の優劣は無いから、意志に関係無く全ての者が巻き込まれる事になる。
部下を下がらせて、王は城下の光景を見遣った。
夜。
街は活気付いたままだ。今暫くすれば、少しずつ静かになっていくだろう。
そんな事を考えて、男は強く眼を閉じた。

それから十月十日が経って、一人の女が女児を出産した。
出産に立ち会った者からその話を聞いて、男は笑い出したくなった。
嬰児。弱く弱く弱く、何の力も持たない、産まれたばかりの子供。その子供は、大の大人達から恐れられていた。
名は無かった。母親が付けるのを拒んだ所為だ。

聞けば、色が無い、のだと言う。そして、その瞳の色は、右が深紅、左が黒だと。王も王妃も、その色を持ってはいない。
誰の子だと、そんな事を囁く者もいるだろう。
紅。
子供の持つ、唯一の色彩。
その色を持つ人間を、彼はたった一人だけ、知っていた。
彼女が信じはしないだろう。
誰も信じはしないだろう。
利用する気でいたのも、単なる事実だ。
だが、それでも、それ以上に、ーー王が魔女を愛していた、事なぞ。
全ては、遅過ぎたが。
何もかも。

彼女はその日、女の子を出産した。
その子供には、影が無かった。
右の瞳は、黒だった。左は深い紅だ。親から受け継いだ色。
彼女は、うっそりと笑う。
「あぁ、愛おしい……。貴方との、娘よ」
カイ。
女は、夢見るようにそう言った。
「さぁ、あの女の娘は、この子を殺しに来るかしら」
女は、微睡むようにそう言った。
その三日後、全ての力と命を使い果たした女は、誰に看取られる事もなく、静かに息を引き取った。

王と魔女の恋が終わりを告げてから暫く経って、二人の女児が誕生した。
一人は色を持たぬ子。
一人は影を持たぬ子。
一人は王宮の真ん中で。一人は辺境の村の片隅で。

　イチはその時、野生の動物に追われていた。
　犬に似た大型の生き物だ。牙を剥き出して追ってくる数匹から、彼女は逃げている。
　元々、温厚な性格の筈だった。自分が何かした覚えも無い。
　ミツから半ば無理矢理渡された痺れ薬を持ってはいるが、それを使う気にもなれなかった。恐らくは何かが原因で酷く興奮しているのだろう。
　何かが何かは、判らなかったが。
「ーーはぁーーはぁ……っ」
　彼女はあまり運動が得意ではないし、体力も無かった。途中で足が縺れて、追い付かれそうになる。
　諦めずに足を動かしながら、仕方無く薬を使おうと鞄を漁った時、唐突に地面が消えた。
「え？　ーーきゃああぁ！」
　足下に注意を向けていなかったイチは、あまりにも無防備だった。彼女は走ってきた勢いそのままに、崖から急斜面を転がり落ちるかに見えた。
　その体を、支えた腕があった。
「大丈夫か？」
「えーー」
　そのままゆっくりと体を離されて、イチは座り込む。彼女を助けたのは一人の少女だった。
　少女は腰の剣を鞘ごと引き抜くと、それを使って軽く動物達を散らした。長いものに怯んだように離れて行く数匹を見遣って、くるりと彼女は振り返る。
「災難だったな、あいつらはーー」
　言い掛けた少女の言葉は、途中で不自然に途切れた。それを受けるイチも、同じように硬直している。
　互いに互いの顔を凝視したまま、黙り込む。
「ぁーーと」
　先に回復したのは、イチの方だった。
「あの、有り難う、御座いました」
　イチを助けた少女は、恐らく同年代だろうと思われた。
　それだけならば、彼女も固まったりしない。彼女達は。
　その少女には、色が無かった。
　白に近い髪、黒の双眸。濃い灰色の唇。纏っているものすら色彩は薄いから、そこだけぽっかりと、色彩が消失しているかのようだった。
　違和感。
　不自然。
　そして、何より。

　全く同じ顔を見合わせて、二人は黙り込む。

「……構わない。つい、手が出ただけだ」
　あいつらは、普段は温厚なんだが。
　少し、気が立っていたのかも知れないな。
　そんな、あからさまに当たり障りの無い会話をしながら、彼女はこちらから視線を逸らさない。
　鬼気迫っている、ように見えた。
「似ていますね、わたくし達」
「あぁーー」
「凄い、偶然」
　イチはそう言って、にっこりと微笑んだ。相手が、毒気を抜かれたように脱力するのが判る。
「そう思いませんか？」
「……あぁ、そうだな」
　彼女は、ふっと笑った。その笑顔に、イチは眼を奪われる。何故だろう。自分と全く同じ顔の筈なのに、そんな印象は吹き飛んで仕舞った。
　とても綺麗だと、そんな事を思った。
「驚いた」
「えぇ、本当に。ねぇ、貴女、名前は？」
　硬直から完全に抜け出すと、イチは立ち上がり、弾んだ声でそう問うた。矢張り色彩という色彩を失い果てている右手を両手で包む。
　温かい。
　血が通っている。
　そんな事が、とても嬉しくなった。
　彼女は、答える事を躊躇したようだった。それから、諦めたように口を開く。
「レイ。何も無いという意味だ」
「レイ。レイ？　良い名前です、貴女にぴったりだわ」
　ふわりと、微笑む。その笑顔に、少女ーーレイは、眼を細めた。
　花のようだと、そう思った。
「ご存じありませんか？　レイには、麗しいという意味もありますの」
「初めて言われたよ。……名前を、訊いても？」
　イチは、大きく頷いた。
「えぇ。わたくし、イチと申します。たった一つのものを、愛し抜けるように」
　あぁ、でも、わたくしにそれは出来ませんわね。
　悪戯っぽく、彼女は笑った。
「わたくし、愛していますもの。とても、沢山のもの」
　何の邪気も無く一切の含みも無く、彼女はそう言い切った。そして瞬く。
　何故だろう、レイが。
　今、出会ったばかりの少女の顔が、少しだけ泣きそうに、見えたのは。
「レイ？」

「……うん。平気だよ」
　少女はそう言って薄く笑んだ。やはりとても綺麗だと、思った。
「レイ、レイ、お時間頂けませんでしょうか？」
　イチは、何度かレイの名を呼んだ。その響きが気に入ったようだった。
「良いよ。流れ者でね、時間は有り余ってるんだ」
「まぁ。わたくしと同じですわね」
「えーー」
　レイは少し驚いた。眼の前の繊細な少女と、旅という言葉がどうしても結び付かなかったからだ。
「何故、皆驚くのかしら」
「それは……」
　イチは不満そうだ。その反応に、レイは苦笑を禁じ得なかった。彼女の自覚は薄いようだ。
「一人か？」
「いえ、もう一人おりますわ。貴女は？」
「今は一人だよ。普段は二人なんだがーー」
　件の魔術師は、この村に入った途端またどこぞへと姿を消していた。
「そうですの。……あぁ、そうーー」
　イチは少しだけ呼吸を止めて、レイを見詰めて、それから照れたように、笑った。
「お暇ならば、わたくしが仮の住まいにしている家に参りません？　助けて頂いたお礼に、食事でも」
　断ろうかと、最初は思った。しかしそうするのは惜しい気がして、気が付けばレイは頷いていた。

「……で、こうなる訳か」
　イチから粗方の事情を聞いたミツは、二人の少女に椀を差し出しながら、深々と溜め息を吐き出した。
「イチを助けてくれてありがとな、レイ」
「いやーー」
　首を緩く振りながら、レイは、ミツの視線が自分を注意深く観察している事にも気付いていた。
　当たり前だろうと、彼女は思う。
　連れの少女と、瓜二つの自分。その上、レイには色彩というものが存在しない。
　穏やかでありながら、ほんの少しばかり冷えた空気に気付いたのか、椀を見下ろしていたイチが顔を上げた。
「ミツ、ミツ」
「うん？」
「レイは、とても温かいのです」
　イチは、宝物の話でもするように、密やかな声でそう言った。何をいきなりと、レイは思う。
　ミツを見ると、彼は諦めたように息を吐き出していた。ついと上がった視線には、既に、レイを探る意図は見られない。
「でも、何でそんな所にいたんだ？」
「あ、あぁ……」
　唐突に変わった話題に、レイの反応は遅れた。たったこれだけで、この問題は解決して仕舞ったらしい。疑問を口にするのも憚られて、心を落ち着ける為に数呼吸置いてから、彼女は口を開いた。
「連れが、な。少し変わっていて」
　長身の男の立ち姿を思い浮かべながら、そう答える。
　宿で起きると、姿を消していた。
　部屋に残る、濃い春の匂い。魔術師がそんな痕跡を残して行く事は珍しくて、悩んだ挙句にその匂いを追っていた。
　今はもう、消えている。
　いつの間にか。
　しかしそんな事を二人に言う訳にも行かず、レイは困ったように首を傾げた。
「いつも、気付くと姿を消している。探して欲しいんだろうな。だから、探していたんだ」
　結局、嘘でも本当でもない事を口にする。それは嘘でも本当でもないが、彼女の持つ、魔術師への印象だった。
「今は？　良いのか？」
「あぁ、うん。その内戻って来るよ」
　確信ではなく事実として、レイは答えた。
　彼女はそれを知っていた。

魔術師の居場所は、レイの横にしかない。それは彼女の与り知らぬ所で、恐らくは魔術師自身が勝手に決めた事だ。
身勝手に。
出会ったその瞬間から、魔術師は魔術師でしかなかった。
微妙な表情で黙り込んだ少女をどう思ったのか、ミツはひょいと肩を竦めた。レイはその表情を眺めながら、椀の中身の匂いを嗅いで顔を顰めた。
「何が入ってるんだ？」
「滋養強壮に効く薬草入り。これが意外といける」
「……」
薬入りと聞いて喜んで飲む人間がいるか。
そう思いながらも、同じものを出された筈のイチが普通に中身を啜っているのを見て、レイは恐る恐る飲んでみた。
「へぇ……」
「な？」
確かに、美味しかった。ミツが自慢げに笑う。
頷いて、もう一口啜った。イチが一足先に飲み干して、さてと立ち上がる。
「夕飯を作らなければいけませんね。何か、材料は――」
「鳥貰った」
「茹でますか？」
「焼いた方が良い。あんたも食うんだろ？」
視線を投げられて、レイは頷いた。
「その為に呼んだのです、ミツ」
「今日は他に誰か来たか？」
「いえ、特には……」
イチは首を傾げる。同じように飲み干したレイに、彼女は顔を綻ばせた。
「ご馳走様」
「あぁ、良かった。飲みましたのね。これは、本当に体に良いのです」
客人に出すのが習慣なのだとか。
旅人と聞いたのに、そんなに客人が訪れるのかとレイは首を傾げた。それに、この家の事も謎だ。
問うと、逆に二人に首を傾げられた。
「え、じゃああんた、どこで寝泊まりしてるんだ？」
「二人で宿を借りているが……」
「「宿！」」
何故かその言葉に、二人は声を揃えて驚いた。
「金あるんだな。真似出来ない」
「放り出されるに等しい状況でしたものね……」
苦笑する彼等に、レイは少しだけ眉を顰めた。訊いて良いものかと迷った挙句、声を落として

問うてみる。
「まさか、……捨てられたとか？」
「そういう訳では、無いのですけれども……」
「教育方針なんだ、うちの」
「ほう」
　会話から察するに、二人は兄妹か、少なくとも同じ人間に育てられているのだろう。
　レイの場合は、放り出される云々以前の問題だった。旅費に関しては魔術師に一任しているが、どこから調達してくるのかなど考えた事もない。
　もしや、少しは気にした方が良いのだろうか。
　そんな事を考えた時、出入り口から声が掛かった。
「ミツ兄！　イチ姉！」
「ご飯食べに来た！」
「母ちゃんからおかず貰って来たよ！」
　騒がしい、それは数人の子供達の声だった。イチとミツが顔を見合わせて笑うのを見て、それが珍しい事ではないのだと察する。
「申し訳ありません。まだ出来上がっておりませんから、少し遊んでからまた来て下さいませ」
「お、これ貰っとくな。後で皆で食べよう」
　二人の言葉に、彼等は眼を輝かせた。
「うん、後でなぁ」
「ばいばい！」
「姉ちゃん誰？」
　子供の一人に首を傾げられて、レイが答えるよりも早く、ミツが少年の頭を軽く叩いた。
「誰ですか、だろ。お前等もな、少しはお兄さんお姉さん達に気を遣え」
「わたくしの恩人で御座います。後でお話をして貰ってはいかがですか？」
　そんな事を言われて、彼女はどきりとした。子供の相手は得意ではないのだ。
　子供という生き物は、無垢で無邪気で純粋だ。だから無垢で無邪気で純粋に、異端を異端と断ずる。何の躊躇も無く。
「いや、私は……」
「はぁい！」
「じゃあね、姉ちゃん！」
「私は――」
　断る間も無く、手を振られて、気付いたら皆駆けて行って仕舞った後だった。レイの反応から察したのだろう、ミツが苦笑する。
「大丈夫だって。あいつ等良い奴等だから」
「まぁ。何か不都合でも？」
　首を傾げたイチに、レイは言葉を失った。絶句していると、そっとミツに教えられる。
「こういう奴なんだよ、イチは」

だから、俺が苦労する破目になる。
冗談めかしてそう言って、ミツは肩を竦めた。レイが息を吐き出したのは、諦めた合図だ。
「……仕方が無い」
にっこりと、嬉しそうにイチが笑った。レイがそっと眼を細める。
やはり、春の花のようだと、そんな事を思った。

　風が来たと、彼は言う。
「あはァーー」
　それは笑った。
「……魔術師」
　呼ばれて、男は振り返る。男の唯一である少女へと視線を向ける。
　少女はーー
　彼女は、顰めた表情を戻そうともしなかった。
　それは風だった。生温く錆臭く、不穏な風だった。南から吹く風。病を運ぶ風。
　いっそ優しく。
　いっそ清らかに。
　いっそ無邪気なまでに。
　名も判らぬその病は、二日三日の内に村中を荒らした。子供を中心にして、五人に一人が病に倒れた。
　この村に医者はいない。流れ者である薬師二人が、今は村人達の看病をしている。
　男は笑っている。
　否と、少女は否定する。男は嗤っている。
　世界でもなく己でもなく自身でもなくそれ以外の何でもないものを、男は只管に嗤っている。
　この風と同じように。
　少女はーーレイは、諦めたように息を吐き出した。そうして、もう一度男を呼ぶ。名ではない、名を呼ぶ。
「魔術師」
「レイ！」
　声は、魔術師のそれに掻き消された。
「麗しい、愛しの、何も無い、存在しない！」
　男はそこで、少しだけ笑顔の質を変えた。
　少女は既に、魔術師のそんな表情から視線を逸らしていたから、その事には気付かなかったのだが。
「さァ、私の『名付け親』。私の『名無し』。忌むべき呪われ子、……愛しいーー」
　男は綴る。恍惚と。
「どう致しマスか、レイ？　全てに嫌われて全てに忌まれた、『名無し』の『名付け親』サンーー」
　『レイ』は、彼女が彼女自身に付けた名前だった。
　魔術師の名前もまた、レイが与えたものだ。
「私のレイ。私は貴女のものですヨ、レイ。えぇ、だから、そうーー貴女が望む全ての事を、私は叶えマス、レイ」
「……何を、言っている？　魔術師」
　レイはただ、男を魔術師と呼ぶ。それこそが男の存在そのものであったからだ。

　魔術師の言葉が判らずに眉を寄せた少女に、男は微笑んだだけだった。慈悲と慈愛と、同じくらいの執着を隠そうともせずに。
「気分はいかがデス？」
「……魔術師」
　少女の声が、低くなる。それに気付かぬ筈も無い男はといえば、上機嫌に嗤っている。ただ、嗤っている。
「風が吹きマス。風が吹きましたヨ、レイ」
「黙れ」
「貴女が呼んだ風デショウ？」
「私は黙れと言ったよ」
　彼女は疲れたようにそう言って、緩く首を振った。
　風は吹かない。
　そう言えばここはどこなのだろうと、レイは今更のようにそう思った。
「時々、君を――」
　レイは男を見上げた。
　魔術師の瞳は、深い緑をしていた。長い間、流れの止まった水の底に揺らめき続けた苔の色をしている。
「本気で殺したくなる」
「えぇ、勿論」
　男はレイを見下ろした。
　見上げても尚、上目遣いになる事のない瞳。その片方が本来は紅である事を、魔術師は知っている。
「差し上げましょうとも。貴女が望むのならば、この体、この命、この心、魂までも。全て、全てネ！」
　色素を持たない少女。
　彩の無い女。
　色があればどれ程まで美しいだろうと、魔術師はそう思う。色が無くて尚、褪せる様子を見せない美しさが。
「愛しい、私の、『名付け親』――」
「……魔術師」
　レイは、その名を呼んだ。それは今までの、怒りを孕んだものではなく、それどころか呆然と――途方に暮れた子供のような、声音で。
　この短い時間で、彼女はどれだけ自分を呼んだのだろう。それを考えるだけで、魔術師は狂ったように笑い出したくなる。だからこそ、彼女以外の存在は魔術師の帰る場所にはなり得ない。
　還る、場所には。
　それは魔術師が勝手に決めた事だ。
　しかし確かに、彼女が受け入れている事だ。
　だから魔術師は迷わない。そしてその為に、彼女に身包みを渡す事すら躊躇わない自信があ

った。
　そんな事をしたら、彼女は怒るだろうか。
　そんな事は望んでいないと、そう言うのだろうか。
　そうなっても構わないと、魔術師は思う。何故ならば彼は、既にそれを決めて仕舞っている。
「待て」
「えぇ、待ちますヨ。待ちましょうとも！」
　にっこりと微笑んだ男に、彼女は力無く首を振った。
「あまり嬉しくはないな」
「オヤ」
「ーーーー」
　声は、無かった。
　けれどその唇は確かに、魔術師の名前を形作っていた。
　だから、魔術師は頷く。当然のように、己の在り処を示すが如く。
「貴女が決めて下さいネ」
　それは、甘い毒を孕んだ言葉だった。
　違う、と彼女は否定した。甘い毒なんて言葉、矛盾している。
　何故ならば毒はいつだって、甘い以外にはあり得ないものだったからだ。
　或いは、周到に張り巡らされた蜘蛛の巣のように優しく。
　獲物を待つ花のように。
　滴り落ちる密のように。
　それは。
　彼女にとっては、それが世界だった。そんな世界を間近で見てきた。否、そんな世界しか知らなかったのだ。
　あの時、あの瞬間、この無遠慮な男に腕を捕まれるまで。
「少しでも接した子供達が倒れて、どんな気分だったんデス、レイ？」
　魔術師の声は問う。
　詰るような甘さで、慈しむような苦さで。
　だからレイは諦めて、素直に口を開いた。
「死にたい気分だったよ」

「……最悪の風だな」
　そう、ミツは呟いた。
　数日前までは必ず誰かがいたのに、今日は誰も来ていなかった。その全ては、南から来た病の所為だ。
　つい、昨日。イチが倒れた。ミツとて、このままでは時間の問題だろうと思う。
「ミツ」
　呼ばれて、彼は振り返る。イチとよく似た声だったが、彼女は今寝ている。そうなれば、思い当たる人間は一人しかいなかった。
「レイか」
「あぁ」
　病に侵された村を、出て行こうとしない少女。元来薬師である二人は兎も角、普通ならば出て行くのが定石だろうに。
　この少女の連れとやらとは、まだ一度も顔を合わせていなかった。
「イチは」
「奥で寝てるよ。会っていくか？　ーーあぁ、でも、ちょっと待ってろ」
　その前にと、例の薬湯を差し出された。
「気休めだけどな。会わないのが一番良い」
「……お前は、ここにいるだろう」
「俺以外の誰が、イチを看るんだ？」
「ーーーふっ」
　あまりにもあっさりと言い放たれた言葉に、レイは思わず吹き出した。くつくつと、喉の奥で笑う。
「考えているのか考えていないのか、判らないな」
「何で」
「……そんなに、大切なんだな。妹か？」
　問いながら、レイは自らの同行者の顔を思い浮かべた。
　毎日見る事もあれば、ぽっかりと姿を見せない事もある。どちらにせよ長い付き合いになる筈なのに、かの男の顔は曖昧なものでしか浮かんで来ない。
　それはあの男が魔術師であり魔術師であって魔術師でしかないからで、これはもう仕方が無い事だと諦めている。恐らく自分はあの男が死んだら、この曖昧な顔すら思い浮かべる事が出来なくなるだろうと。
　あの男は、レイが死ぬ時にはどうするのだろう。病に倒れた時は。傷を負った時は。
　あの魔術師は。
「いや、違うよ。親が拾ってきたから、血は繋がってない」
「心情的には？」
　鋭く、どちらかと言えば好奇心で切り込むと、不快を表すかと思われたミツは意外にも穏やかに笑った。

「あいつは俺だ」
「ーー成る程、理解した。充分だ」
　その、きっぱりとした言葉に、レイは頷いて力無く首を振った。野暮な事を聞いたという思いがある。
　イチはミツ。
　ミツはイチ。
　これ以上無く、明確な話だった。
　しかし、それでもーー今のこの現状を理解しているのかと、疑問は残る。
「お前が倒れたら、この村はどうなる？」
「……」
　静かな声で、彼女はそう問うた。それは正しい質問で、だからこそ卑怯だった。彼女はそれを自覚していた。
「体の痛みを和らげて、一時的に熱を下げる事しか出来てない」
「それでもだよ」
　彼が何と返すのか、レイには興味があった。だからただ、彼女は彼の返答を待った。
　返されたのは微笑だった。
「そしたら、イチが俺を看てくれるよ」
「君は人の話をーー」
「出来た」
　彼女が言い募ろうとした台詞は、ミツの声に先を消された。最近こんな事ばかりだと、レイはそう思って溜め息を吐く。
　他人を巻き込むのは、己の十八番の筈なのだが。
　小屋の中は至極狭い。奥の部屋を含めて、二部屋しか無かった。出入り口の反対側、奥へ通じる薄い扉を見遣って、ミツは頬を緩ませる。
　そして唐突に、レイに一枚の紙を示した。
「これ、何か判るか？」
「……いや、生憎」
　紙には、幾つかの覚えのある薬草の名らしき字が書いてあったが、それが何を意味するのかは判らなかった。自国で使っている言葉ではない。似たような言語を知っていたが、それとも微妙に違うようだ。
　ミツの手元を見ると、今まで薬草を混ぜ込んでいた鉢がある。
「西の山の向こうにあった国の文字で書いてあるんだ。これを使って、金儲けする人が出ないように」
　西の山を越えた先に広がっていた国は、滅んで久しい。今では文化も文明も殆ど残っていない筈だった。
「……ミツ、これはーー」
「俺の父親と母親が書いた、この流行り病に効く薬の調合法。これを二、三日飲ませれば、すぐ治る」

「その為に、旅を？」
「まさか。お父さん曰く、――序でかな」
「そんな事が――」
　レイは絶句した。まだ、誰も判っていない筈の病への対抗策を、実際に診るまでもなく示して見せたというのか。
　そして、この少年。否、既に青年と呼ぶに相応しい年齢だろうか。その調合を、こんなにあっさりと、自信を持って成し得たと断ずる男。
「悪いけど、この薬草をもう少し採って来て貰えないか？　材料が足りないんだ。一両日中には、村人全員の分が出来上がるよ」
　病自体、感染力は強いが、そんなに重いものではなかった。この隣の村も、既に発症している者は十人よりも少ないという話だ。
「長引いてるのは、子供や老人だろ。南に向かいながら、配って歩くよ」
「……了解した。イチの病が治ったら」
「また、皆で夕飯を食べような」
　その時に、レイの相方がいるかは判らないが。
　それは楽しい事だろうと、彼女は思った。その程度には、レイはこの二人を気に入り始めていたからだ。
　だから、彼女はこう問うた。
　薄らと笑んで、今までになく、優しく甘い声で。
「私の所為で病が訪れたのだと、そう言ったら――どうする？」

ミツが薬を完成させてから、十日近くが経っていた。
彼はその薬を、全ての村人に無償で配っていた。そして全員分を作り終えた後、案の定自分が倒れた。
イチの看病と彼自身が作った薬で、そのミツも大分回復している。
風はどうやら、止んだようだった。
その時、レイとイチは、村の外れを歩いていた。もう少し歩けば泉がある事を、イチは知っている。
偶に地面に視線を彷徨わせながら、飛び立つ鳥を見送り、木々の蕾を見遣る。
イチはそっと顔を綻ばせた。
「皆さん、元気になられまして宜しゅう御座いましたわ」
「そうだな」
無邪気に喜ぶ少女に、レイは眼を細めた。同じ顔、同じ声、同じ容姿をしていても、ここまで違うものかと。
イチはまるで、生きているかのようだった。
彼女は美しい。素直にそう賞賛出来た。
ぽつりとミツに漏らしたら、何を当たり前の事を今更言っているのかと、鼻で笑われたのだが。
眼も当てられぬ程に醜い自分とは、段違いだった。
色があるだけか。無いだけか。
そんな訳は無いだろうと、自身の考えを否定する。
「可笑しい、な」
彼女は、小さくそう呟いた。幸いな事に、少し前を歩いているイチには聞こえなかったようだった。
「レイ？」
「何でも」
不思議そうに首を傾けたイチに、緩く首を振る。それだけで彼女は安堵した表情になって、淡く微笑んだ。
草叢を揺らす小動物に眼を向け、流れる雲に視線を遣り、水のせせらぎに耳を貸す。そんな彼女の動作の一つ一つが、レイがもう随分と長い間忘れていた事を思い出させる。
否。
錯覚だろうと、そんな事を思った。
懐かしい何かなど、レイには無いのだから。
そんな、温かな気持ちと絶望の両方を抱えながら、レイはイチと歩いている。
花を愛でる気持ちは持っていた。
風を愛する心も。
命を愛おしむ思いも。
最近は不思議な事ばかりだと、そう思った。少し前に、ほんの短い間だけ、親友であった少女

の事を思う。
　恐らく自分は愛しているのだろう。
　あの時の彼女も。
　今、ここにいるこの少女も。
　そして、この少女しか眼に入っていない青年や、あの不愉快極まりない魔術師も。
　多分、確証は持てずとも。
　人の感情など、その程度の事なのだろう。
　自分から近付いたのか、そうでなかったのか、既にそんな事すら判らなくなって仕舞っていた。
「見付かりませんわ……」
　振り返って、困ったように眉根を寄せた少女に、レイは首を傾げた。
「何か探していたのか？」
「まぁ！　レイ、今日の夕食をと、ミツが仰っていたではありませんの」
「夕食……あぁ、夕食」
　言われて、レイは、漸く思考を今現在の時間に戻す事が出来た。
　そう言えば、彼はそんな事を言っていた。
　しかし、レイには何を探せば良いのか判らなかった。そもそも、何が食べられるものなのか、そうでないのかすら判らない。
　イチはとても詳しかった。その辺りは、流石薬師と言うべきか。否、本来薬師であるのはミツ一人であるらしいと聞いたので、この言い方は不適切だろうか。
「何を探しているんだ？」
「花ですわ。そう、淡い黄色の……小さな。揚げ物にして頂くのです」
「へぇ」
　花を揚げ物にするとは。今まで知らなかった食べ方に、レイは感嘆した。遠目で見た、父や母の食事には、花は見た目を良くする為の添え物として付いているだけだったし、旅の間もそんな食べ方は知らなかった。
「そんな食べ方もするんだな」
「あら、知りませんでしたの？　――あぁ、でしたら」
　ぱっと、彼女が顔を明るくした。イチが次に言う台詞を、レイは簡単に予測出来る。
　そして案の定、少女はこう言った。
「今日、一緒に作りませんか？　そうしたら、旅のお仲間にも教えて差し上げられます」
「……うん」
　あまりにも予想通りの台詞に、レイは思わず微笑んで仕舞っていた。
「そうだな」
　もし、本当にそれをしたら。あの魔術師は、どんな顔をするだろうかと考えて、また笑った。
　考えるまでもなかったか。
　いつも通り、嗤うに決まっている。
　或いは、笑うだろうか――。

「……？　何だか、楽しそうですわ」
「楽しいのかもな」
　そう、彼女は答えた。少しだけ、素直になってみた心算だった。その返答に満足したのか、くすくすと笑いながら、イチは彼女の前を歩いている。
　その時、眼の前の体が唐突に倒れ掛かった。
「え……」
「きゃあ！」
「イチ？」
　慌ててイチを支える。出会いもこんな形だったなと、レイは顔を引き攣らせた。
　そんなに道が悪いという訳でもないのに、よくもまぁ転べるものだ。これではミツが過保護になるのも無理は無いのかも知れない。
「……何で転ぶかな……」
「も、申し訳ありません……！」
　顔を真っ赤にして、イチが自分の足で立ち上がった。微かに潤んだ瞳と何気無く視線を合わせて――レイは息を詰まらせた。
「イチ……その、眼」
「え？　あぁ――」
　何の事か、すぐに彼女には判ったらしい。苦く、誤魔化すように微笑んだ。
「片方だけ色が違うと、目立ちますから……普段は隠しておりますの。それに……」
　彼女の、瞳。
　右は黒。見慣れた色彩だ。そして、先程まで確かに同じように黒かった筈の左の色は、深い紅となっていた。
　イチは苦笑する。何の影も無く。
「赤は不吉で御座いましょう？」
　体に衝撃が加わった拍子に、色を隠していたものがどこかへと落ちて仕舞ったらしい。
「ミツは、そんなに気にする事も無いと言って下さるのですけれども……レイ？　レイ？」
「――ん」
　はた、と。
　呼ばれて、レイは我に返った。鮮やかな血の色の瞳から視線を逸らしながら、なんとか頷く。
「あ、あぁ。平気だ」
　そう、平気だ。
　最初から、気付いていたではないか。知ろうとしなかっただけで。
　魔術師とて、言っていたではないか。判ろうとしなかっただけで。
　壱が零の運命だと。
　彼女が、自分の。
「レイ？」
「何でも無いよ、本当に。早く戻らないと、ミツが心配する」

だからこそ、自分は自分なのだから。
レイはうっそりと微笑んだ。彼女の腕から手を離し、流れるような髪を梳いてやる。
擽ったそうに笑うイチに、レイは眼を閉じた。
知っている。
判っている。
最初から。
視線を、地面に落とす。何故今まで気付かなかったのかと、レイは愕然とした。
イチの、足下。少女の足下。生きる者の足下。存在する者の足下。そう、最初から。
彼女には影が無い。

レイ。
それはレイが、己自身に与えた名だった。
呪いですらない。
祝いですらない。
それは、ただの事実でしかあり得なかった。
何も無い、もの。
カラ。
ソラ。
彼女には名前が無かった。
王位継承権第零位、第一王女。彼女が持つのは、その肩書きだけだ。
忌み子。
呪われ子。
名無し子。
そして何よりも困るのは、――それが単なる事実であるという、その事だった。
自分のすぐ後に産まれた腹違いの妹は、彼女と一緒にいる時に毒虫に噛まれて以来、視力を失った。
唯一自分を庇ってくれていた乳母は、自分の眼の前で階段から落ちて死んだ。
どちらも事故だ。
そしてその事故が、レイの周りでは笑えるくらいに多く起こった。
忌み子。
呪われ子。
それは、単なる事実だった。
レイがこの村に辿り着いたのと時を同じくして、望まれぬ風は吹いた。それはもう、予定調和の如く。
そして、そこで知り合った二人にとっても――やはり自分は、歓迎される存在ではないと、既に彼女は理解していた。
否、最初から。
眼を、逸らし続けていただけで。
彼女の視線の先では、無防備にイチがまどろんでいた。ミツは近くにいない。大方、薬草でも探しに行ったのだろうと考えて、心中毒吐いた。
何故、自分と二人にしたのか。
誰よりも愛している女を、レイの傍に置いて行ったのか。
まるで。
それでは、まるで。
自分を、信頼しているようではないか――。
「――――」
自嘲して、レイは唇を歪めた。イチが起きる気配は無い。

伏せられた左の瞳が本来深紅である事を、既にレイは知っている。
そしてやはり同じように隠されたレイの右の瞳も、本来は同じ深い血の色だ。
色の無い自分。
影の無い彼女。
判っている。判っていた。そう、とうに。
イチはレイの片割れだ。魂の半分、恐らくは王を呪った女の腹から産まれたであろう少女。
彼女は微かに、首を傾けていた。
喉が晒されている。
白い喉。
外に出ない訳ではないのに、焼ける事を知らないかのようだ。
我知らず、唇が笑みの形に歪んだ。
その喉に、手を掛けて。
その喉に、刃を滑らせて。
その喉に、縄を絡めて。
非力なこの少女は、抵抗する事すら出来ないだろう。
自分は知っている。彼女は知らずとも。
そうすれば、自分は『レイ』ではなくなる。
人間。
或いは彼女を殺せば、『生きる』事も可能になるだろうか。
色を伴った世界は、どんなものだろう。
息を吸う。
一つ数えて、ゆっくりと吐き出した。
指先が小刻みに震えているのが判る。
音も無く近寄って、レイは、数日前にそうしたように、ゆっくりと彼女の髪を梳いた。
腰まで届く、美しい髪。
白銀にも似た、葡萄の色。それが誰の色か、レイは知っている。
父の——この国の、王のものだった。レイの父であり、イチの父である男。仮令、本人は知らずとも。
愚かな男。
女一人救えない、醜く弱い、まるで——人間のような、男。
その男の血を引いているとは思えない程に——否、実際本当の意味で彼の血を継いでいるのかは判らないのだが——美しい、少女。
愛おしい。そう思った。
己の指先を見遣る。白に似た、灰色。冗談のような悪夢のような、何かの間違いのような。
否。
事実、間違いだった。
世の中は間違いだらけだった。
頭を撫でていた手を、そっと滑らせる。肌理細かい肌に指を滑らせ、僅かにのけぞった喉をな

ぞる。
　ゆっくりと、指を絡みつかせた。
　瞬間。

「レイ……？」

「！」
　名を呼ばれ、レイは弾かれたように後退った。ひくりと、喉が引き攣る。
「……！　……」
　自分の荒い息遣いが、耳に不愉快だった。
　イチが起きる様子は無い。相変わらず無防備な、安堵しきった表情で、眠り続けたまま。
　何よりも。
　ミツの名ではなく、レイの名を呼ばれた事に、心が震えた。
　動揺を隠す事もないまま、イチから視線を逸らせないままに、一歩、二歩と後退する。
「！」
　手に何かが当たったと思った瞬間、机に置き去りになっていた擂り鉢が激しい音を立てて砕け散った。
　その音に反応して、今度こそイチが眼を開ける。
「まぁ……。いかがなさいましたの、レイ？」
　数え切れない破片へと変わった擂り鉢の惨状に眼を見開いて、イチはレイを見上げた。今は黒い双眸が、瞬く。
　眼が、合った。
　今、自分が何をしようとしていたか。何を考えていたか。その全てに、怖気が走った。
「レイ……？」
「――来るな」
　立ち上がり、近付いて来ようとした少女を、鋭い声でレイは制した。そのまま家から逃げるように飛び出す。
「レイ！」
　追う声には、振り返らなかった。

その女の話は、幼い頃から聞かされていた。
第一王女。
存在を抹消された姫。
王位継承権、第零位。
忌み子。
呪われ子。
そして、『名無し』ーー。
名前を持たない子供は、いつからか己を『レイ』と称し始めた。
レイ。それが持つ意味を、アンは知っている。
何も無い。存在しない。
どんな気分で、彼女はそれを名乗っているのだろう。そんな事を、幼いながらに考えたものだった。
狭い路地に蹲るように生きていたアンが育ての親に拾われたのは、十に満たない年齢の頃だった。
親はいなかった。
兄弟も。
守るものも。
守ってくれるものも。
アンは、何も、持っていなかった。
彼女の顔立ちは、整っている部類に入るものだった。だから、それを最大限に活用した。
可愛らしい子供の涙には誰しも弱い。その事を、アンは知っていた。
否、自分でなくとも、子供ならば誰でも知っていて、利用している事なのだろう。仮令自覚は無くても。
憐れに誘われたのか、近付いてきた老人を殺して、食べ物を奪った。
成長すると、体を使う事も覚えた。幼い子供を抱こうとする男は案外探せばいるものだと、彼女は知った。
否、探そうとせずとも自然と見付かった。そういうモノ同士には、判るものなのかも知れなかった。
だから、彼女に拾われた時も、あぁ売られるのだろうかと、そんな感想を持ったのだ。
何の感慨も湧かなかった。
今日から己が子供だと言われても、何の信用もせずに。
一年経ち、二年経って、それが勘違いだったのだと知った。
三年経ち、四年経って、それが更に勘違いだったのだと知った。
彼女はより効率良く人を殺す術を覚えた。それでも、拾ってくれた彼女という存在は、絶対のものだった。
権力に取り憑かれた女。
自分の養母である女。

彼女の言葉を思い出す。レイを殺せと、彼女は言ったのだ。
彼女が言うのならば、自分はそう動くだけだった。アンはその為の存在だったからだ。
色を持たない少女の事を思い出す。ほんの短い間だけだったけれども、確かに信頼出来た少女。
良い友人になれただろうにと、そんな事を思った。
或いは自分の運命すらも、彼女の存在に歪められて仕舞ったのだろうか。
「……馬鹿みたいね」
アンはそう呟いた。
世界はどうやら、平穏のようだった。
まるで冗談みたいに。
嘘みたいな。
「……本当に、馬鹿みたい」
その言葉が誰に向けてのものなのか、既に彼女には判らなかった。
何故殺してくれなかったのかと、嘆きたくなる。何故殺されてくれなかったのかと、叫びたくなる。
どちらにせよ、自分は帰る事が出来ないのに。
彼女を殺すまで。
だから、どうせ帰れないならば、殺して欲しかった。
あの場所に戻れない事は、アンにとっての恐怖だった。
ゆっくりと、息を吸って、吐いた。湿った匂いが、鼻腔を擽る。雨が近いのだろうと、彼女はそう思った。
殺さなければ。そう思う。
あぁ、けれど。同時に、こうも思うのだった。
あの時、あの瞬間。
何故彼女は、レイは、あの忌むべき呪われた娘は、自分を殺さなかったのか。
そして、最後に。
遠退く意識の中で確かに投げ掛けられた、けれども聞き取れなかった言葉。温かかったような、気がする、それ。
あの時に何と言ったのかを、可能ならば問うてみたかった。

どこに行こうかなどと、考えてはいなかった。
目的も無かった。
多分理由も。
ただ、あの場所から、彼女の傍から、離れたい一心だった。
そうして村の外れまで来て、そこが何度か通った道である事に気付けたのは、奇跡に等しかった。
思い出さなければ良かったと、そう思う。
そこは、少し前、レイがはっきりとイチの『色』を見た場所だった。
更に奥に行けば小さな泉がある。その事を、レイは既に知っていた。
あの時は、知らなかった事なのだが。
荒くなった呼吸を落ち着けるように深く息を吸って、レイは足を緩めた。後ろからイチが追って来る様子は無い。恐らくは追い付けなかったのだろう。或いは途中で諦めたのかも知れない。
どちらでも良かった。
否、後者の方が良いと、そう思った。
同じ村に、長くい過ぎたのかも知れない。この、自分という災厄が。軽く頭を振って、戻ろうと、強く思った。
戻ろう。
何も無い、あの場所へ。
名の無い男との孤独へ。
「魔術師」
レイは男の名を呼んだ。そして、眼を閉じて待つ。
現れた気配は、その男のものではなかった。一瞬イチかと思ったが、それも違う。戦闘訓練を重ねた者だ。そして彼女はその気配の主を、よく知っていた。
あまり知らなかったのかも知れないが。
知れるだろうと、思っていた相手だった。
だからレイは閉じていた双眸を開き――そしてくるりと振り返り、眼の前の相手に何の影も無い笑顔を向けた。
「やぁ、アン」
「……！」
気付かれているとは思っていなかったのか、少女が軽く息を飲んだ。それから諦めたように息を吐き出して、薄く笑う。
まるで昔年の友人にでもそうするように。
「ご機嫌良う、レイ」
「うん」
レイもにっこりと頷いた。長年の友人にでもそうするように。
それを見て、アンは、全身に無意識に籠めていた力を抜いた。脱力し、指先から爪先までを広げて、全身の筋を伸ばす。

「良い天気ね」
「そうだな」
「嘘」
　少女の返事に、アンは即座に切り返した。
「天気に、良いも悪いも無いでしょう？」
　あたしも。
　貴女も。
「ーーふふ」
　その言葉に不意を衝かれて一つ瞬くと、暫し考えて、レイは少しだけ笑った。同意の合図だった。
「何をしているのかしら？」
「……あぁ、道連れをね、待ってた」
「あの男？」
　アンは露骨に嫌な顔をした。当然だろうと、思う。仮令あんな事の後でなくとも、魔術師に対して良い印象を持つ人間など皆無に違いない。
　自分にとっての、他の人間がそうであるように。
「本当に、ーーあの男、訳が判らなかったわ。一体、ーー何？」
「『何』？」
　その問いを受けて、レイは、場に不相応な程のんびりとした動きで、首を傾げた。一つ、瞬く。
　まるで、そう、質問の意味が判らぬとでも言いたげに。
「ただの理不尽だが？」
「ーーーーー……」
　アンは何かを言おうとして、緩く首を振って沈黙した。己の問いの無意味さに気付いたのだろう。
「えぇ、そうね。そうだったわ」
　風が吹いた。
　望んだ訳ではないが、そう厭う必要も無い風だった。無責任な風は無責任に木々の梢を揺らして、やはり無責任に去って行く。
　日は、高い。
　太陽の下にいる魔術師というのが想像出来なくて、少しだけアンは笑って仕舞う。前回会った時は、月の光の下だったから。それが初めてであったし、それ以降会った訳でもない。
　少女は、あの時、あの夜に握っていた短剣を、すらりと引き抜いた。魔術師が来る前に、終わらせなければならない。
「そう、忘れる所だったわ」
「何か？」
「あたしはね、レイ。文句を言いに来たのよ。何で殺してくれなかったのかってね」
「そんな事を言われても……」

困るな。レイはそう嘯いた。冗談に冗談で返すような、軽い口調で。
「さぁーー」
始めようか？
同時に動く。
剣戟の音が響いた。

　少女は、鼻から息を吸い込んだ。
　鼻腔を擽る、匂いがある。
　それが、雨の中で咲いて音も無く朽ちた薔薇の、強烈なまでの残り香だと気付き――レイは、少しだけ微笑んだ。
「下がっていろよ、魔術師」
　聞く者は無い。
　同時に、服の下に持ち歩いていた短刀を引き抜く。刃はアンの短剣よりも僅かに太く短い。
「あら」
　間近にある淡色の双眸が見開かれた。
「貴女……、武器なんて持ち歩いていたのね」
　その言葉に、レイは少し考えてから得心した。彼女と共に行動していた時は、偶々持っていなかったのだ。この村に来た当初に持っていた剣は魔術師がどこからか入手してきたものだったが、既に売って仕舞っている。
「意外か？」
「少しだけ」
　そんなもの、必要無いように見えたのだけれど。
「買い被り過ぎだ」
　名無しの少女は微笑んだ。
「私も、人間だからね」
　そして、動く。同時に。
　刃をずらして、更に距離を詰めた。体を捻り、薄い腹に膝を叩き込もうとするが、寸前で避けられる。
「えげつないわね！」
「正当だろう？」
　レイは心外そうに瞬き、摺り足でアンに肉薄する。下から突き上げるように顎を狙った刃を己の得物で弾き、右足を軸にして回転しながら肘を繰り出したアンの動きは、完全に読まれていた。
　舌打ちし、蹴り上げるように足を上げて後ろへと跳ぶ。レイは既に距離を取った後だ。
「……馬鹿に、しているのかしら」
　たん、と軽く地を蹴る。横薙ぎに剣を振るいながら、動きを予測して身を沈めた。右へと重心をずらしたレイの懐に入り込み、左手に持った本命の短剣を喉へと滑らせる。
「えー―」
「危ないな。もう一本持っていたのか」
　苦笑するような、声。
　後ろから。
　レイは微笑んだ。
「殺す気で来い」

「そんなのーー」
　言い掛けて、言葉に詰まった。
　アンは動きを緩め、二、三度深く呼吸した。相手が動く様子は無い。その事が、彼女を焦らせる。
「余裕？　侮辱？」
「敬意かな」
　短い質問に、やはり短い返答。軽やかに、楽しげに、長年の友を相手にしているかのような、声で。
　そう、あの時のように。
　アンは眼を伏せた。
　風。
　望んではいない。
　厭う程ではない。
　その程度だ。人間より余程良い。
　彼女は眼を開ける。レイも佇んでいた。
　次に動いたのはレイだった。
　斜め上から走る刃を迎え撃とうと右腕を上げようとしてーーー瞬、動きが止まる。
「何!?」
　痛みも無い。感覚も無い。一瞬混乱するアンの鼻腔を、吐き気がする程甘ったるい匂いが擽った。
　腐り落ちる寸前の、薔薇のような。
「……あぁ」
　少女の苦笑。
「余計な事を」
　アンが体の自由を取り戻した時には既に、相手の持つ短刀の刃先が白い喉を切り裂く寸前まで近付いていた。
「ーーーーー！」
　殺される。
　その時、その瞬間、彼女が感じたのは他のどんな事でもなく、その事実に対する恐怖だけだった。真っ白になった頭の中に、黒が弾ける。
　他の何でもなく。
　死に対する、根源的恐怖。
　これが、人間か。
　これが、人間だ。
　そして、再び冷静に状況を見られるようになった時ーー弾けた黒が血であった事を、アンは漸く理解した。
　最初は判らなかった。だが、生温い、独特の錆臭さを持つ液体は、血以外のものではあり得なかった。

　彼女の血ではない。
　それは、眼の前に倒れている、小柄な少女の胸から流れていた。
「え……!?」
　あり得ない状況に、呆然とする。可笑しい。こんなのは、可笑しい。倒れ伏しているのは、本来アンである筈だからだ。
　それこそ、望んで身を投じない限り。
　この、少女は。
「レイ!?」
　アンは、その名を呼んだ。名無しの少女の名を呼んだ。白い顔。瞼が、ふるりと震えて、黒の双眸が覗く。
　その片方が血と同じ色をしているなどという事は、彼女は知らないのだ。
「ふ、ふふ……」
「何故――何を、しているの？」
「あぁ、うん。――アン、君は」
　人を殺したくなどないのだろ。
　酷く優しい表情で、彼女はそう言った。それは質問ですらなかったし、返答など必要としない、事実でしかなかった。
「レイ……!?」
　阿呆のようにそう繰り返す事しか出来ないアンが、少女の体を抱き上げる。未成熟な体の異常なまでの軽さにぞっとした。
　己を抱き上げる腕の温かさに、レイが微笑む。震える唇が、それでもはっきりと音を紡いだ。
「『それは私の台詞』だよ」
「……何の、話かしら」
「『ありがとう』も、『楽しかった』も。――これが、聞きたかったんだろ？」
　レイが微笑んだ。
　言われた少女は暫し呆然とし――そして息を詰まらせ、緩く頷いた。
「えぇ。満足だわ」
「それは良かった」
　少女の白い指先が、そっとアンの喉元を滑る。愛を囁くように、想いを紡ぐように。
「君の望むものを上げるよ」
　彼女が、それに反応するよりも早く―――

「お休み、愛しい友人」

　そこで、意識が途切れた。

何が起こっているのか、まるで判らなかった。
突然逃げるように家から飛び出した友人が心配で、何も考えずに追ってきた。レイとイチの身体能力を考えれば当然のように、途中で見失って仕舞ったが。
そんなに長い時間は、経っていないだろう。
「寒い……？」
不意に感じた冷気に、イチは思わず身を震わせた。何事かと思い振り返り、辺りを見回すが、可笑しな事は何も無い。
気温も。
寒気など感じない。
夏の気候だった。
「レイ？」
二度と、彼女に会えないのではないか――そんな不吉な予感に、イチは強く念じるようにその名を呼んだ。或いは祈るように、存在しない名前を。
「どちらにいらっしゃいますの？　返事をして下さいませ！」
当然のように、返事は無い。
レイは、泉の方向へと向かっていた。そこに意味があるのか無いのかは判らないし、そもそも目的地が泉なのかどうかも判らない。
そう、何も、判らない。
判らなくて良いではないか。イチはそう思う。
判らないから、判ろうとする。
それこそを友人と呼ぶのだと、彼女は無邪気にそう信じていた。
それが人の、美しさだと。
彼女はそう考えていた。そう考える事を、彼女は許されていたからだ。
闇雲に走っても意味が無い事を悟って、足を止めた。ゆっくりと息を吸って、吐いて、そこで止めて、瞼を伏せる。
世界が流れ込んでくるのを感じた。
鳥の囀り。
風の囁き。
花の歌声。
土の匂い。
陽の温もり。
一つ一つ、異常があるか無いかを確認していく。人間というものはそもそもが異常であるから、同じものを見付け出すのは得意な生き物なのだ。
啼くのを止めた鳥はいない。
流れを止めた風も。
泣き出した花も。
生を放棄した土も。

傲慢さを失った太陽すら。
それに気付いた彼女は落胆し――そして眼を開ける直前に鼻腔を擽った匂いに、首を傾げた。
どこかで嗅いだ、匂いだった。
甘ったるい。
吐き気を催すような。
毒を孕むかのような。
生憎と、何の匂いなのかは判らなかったのだが。
「……レイ？」
ぽつりと、彼女は呟いた。呟いて、次いで足を動かした。
その中に混ざっていた、もの。
ミツと共に多くの患者を診てきた中で覚えた、それは血の匂いだった。
「この声が、聞こえていらっしゃいますか？　レイ！」
声を張り上げても、無責任な喧噪が返って来るだけだった。イチは返事を諦めて、周囲を探す事に集中する。

それは、緑に囲まれた中で、あまりにも異質な光景だった。
折り重なる、赤と黒。
有色と無色。
少女と少女。
どちらも、ぴくりとも動かない。
周囲に広がる黒が何なのか、最初、イチには判らなかった。折り重なる二人が誰なのかも。
だからそれが、胸から黒い血を流したレイと、傷が見当たらないにも関わらず全身を血に染めた見知らぬ少女であると気付いて――彼女は、危うく出そうになった悲鳴を飲み込んだ。
悲鳴を上げても周囲には誰もいない。そんな無意味な事をしてもどうにもならないと、彼女は即座に判断を下した。
震える手で、赤に染まった少女を抱き上げる。初めて見る顔だ。見直してみても、傷は無かった。だが、それが彼女の血である事は確かだろう。
レイの血は、黒にしか見えない。
色を忘れたみたいに。
長髪をそのままに流した少女は、殆ど全身が赤で染まっていて、元々何色の服を着ていたのかすら判らない有り様だった。彼女の口許に、そっと手を持っていく。
呼吸は、していない。
胸元に手を当てる。
鼓動は、完全に止まっていた。
首に触れる。
血の気の失せた肌は、気の所為か、こうしている間にもどんどん冷たくなっていく気がした。
「何という事……」

　これは、もうどうにもならない。
　名も知らぬ少女の遺体をそっと横たえて、イチは祈るような気持ちで友人の手に触れた。
　その手は、まだ温かい。
「レイ……レイ!?」
　驚いて、叫ぶようにそう呼び掛ける。当然のように返事は無かった。しかし、微かに呼吸している。
　確かに。
「……ーーー！」
　今からミツを呼んでも間に合わない。それに、彼の本業は医師ではなく薬師だ。こんな重傷では、どうにもならないだろう。
　助けられない。
　その考えが頭に浮かんで、視界がちかちかと明滅を繰り返した。端から赤に染まっていく気がする。
　錯覚である事を、彼女は既に知っていた。
　イチは呼吸を整えると、邪魔な視界を意識から締め出した。先程と同じように。
　黒いそれが、彼女の血だ。
　そっと、胸の傷に手を這わせた。ぬるりとした感触が伝わってくる。

　影の無い少女は、衝動に逆らわずにそのまま絶叫した。

夢のようだった。
否、実際に夢だった。
夢だったのかも知れない。
夢ならば良かった。
否、……悪夢だ。
夢ですらないと、彼女は知っていた。
夢を見た事は、無かった。
一度も。

『ーーーーーーーーーー』

最初の最初の瞬間に囁かれた言葉は、どうしても思い出せなかった。
自分と同じ色を持つ、女性だったような気がした。
彼女は眠っていた。
夢も見ないで。
夢も忘れて。
苦痛も快楽も、同じ事だった。
何故なのか、忘れて仕舞った。
理由は思い出せなかった。
「……、……」
ぱくぱくと、阿呆のように口が動く。
ただそれだけだった。
あぁ、夢だ。
少女はそう、確信した。

イチは眼を覚ました。
「ん……」
「イチーー起きたか、イチ！」
誰だろうと、ぼんやりした頭で考える。
聞き覚えのある声だった。
世界で一番安心出来る声だった。
イチ。それは自分の名前だと、思い出す。そして、その名を繰り返し呼ぶ声の主が、ミツである事も。
「ミツ……」
「イチ！　良かったーー」
息が少しだけ苦しいのは、自分よりも少しだけ年上の男が力任せにイチを抱き締めているから

だろう。耳に掛かる息が、隠しようもなく震えていた。
　掠れた声が、心地良い。そう思って、イチは微笑んだ。
「お早う御座います、ミツ」
「お早うじゃなくて……あぁ」
　体を離したミツは言い募ろうとし、途中で諦めたように首を振った。眩しそうに眼を細めたイチの顔を覗き込む。
「俺の心臓を止める気？」
「まぁ」
　少女はゆっくりと瞬きを繰り返した。身を起こすと、強い眩暈がする。その体を、慌ててミツが支えた。
「それはいけません。貴方は愛されています、ミツ」
「イチもな」
　未だ引き攣った顔のままで、ミツはなんとかそう微笑んだ。
「夢を見ました」
　まどろむ幼子のような台詞に、彼は静かな動きで少女の髪を梳いた。さらりと、指の間を擦り抜ける淡色。
「どんな夢？」
「人の見る夢です」
「……そう」
　彼女の赤と黒の瞳を覗き込んで、ミツはゆったりと頷いた。何かの拍子に衝撃を受けたのだろう、瞳を覆うものはどこかへと失せていた。
　彼女の後ろに影は無い。
　今までも。
　恐らくはこれからも。
　自分の視界が滲んでいる事に、遅れて気付いた。笑った拍子に雫が零れそうになって、誤魔化すように少女の肩に顔を埋める。
「どこか痛いのですか、ミツ？」
「うん、そう――どこもかしこも」
　痛くて堪らない。
　ミツは体全体で息を吐き出して、イチの体を抱き締めた。
「……レイは？　わたくし達の、友人は」
「もう行ったよ」
　彼女が無事である事は、互いに判っていた事だった。だから、少しだけ震える声で問われた言葉に、事実だけを返した。
「もうこんな無茶はするなよ」
「善処は致します」
　彼女こそが幼子を宥めるかのようにそう言って、小さく苦笑する。またいつか、どこかで会えるだろうか。

　長い人生の中でほんの少しだけ道が交わった、大切な友人ーー。
「イチが元気になったら、俺達も行こうか」
「えぇ、ミツ。貴方が望むなら」
　少女を見舞いに来たのだろう、聞き慣れた子供達の騒がしい声を耳にして、二人は顔を見合わせて微笑した。

既に、陽は落ちて久しい。そろそろ月も落ち始めようかという頃。
「……驚きましたヨ。彼女にあんな力があるなんてネ」
嘯いた声音は彼には珍しく、心底驚いたような声音だった。
……けれど、嘘だ。この男に真実など欠片も無い。レイはその事を知っていた。
「まさに、正反対――デショウ？」
「……そうだな」
自らが受けた傷を、数倍にして相手に与える、レイの力。それは、あの非力な少女の命を奪うには充分だった。
災難だ。
災厄だ。
そのもののような力ではないか。
「逆なんだな」
自分には、傷付ける事しか出来ない。
イチがレイに対して使った力は、彼女とは正反対の力だった。自分の体を犠牲に、相手の傷の大半を己へと引き受ける力。
結果、彼女は数日の間、生死の境を彷徨った。
何が原因でそうなったのかを悟りながら、そしてその事に対して何の言葉も無く消えたレイに、結局最後の最後まで何も言わなかった薬師の少年。
「私にも、イチにも、君のような力は無いよ、魔術師」
レイはそう、男を振り返った。
魔術師の周りでは、光が舞っている。
小さな光点の一つ一つが命である事を、彼女は知っていた。
悪夢のように幻想的な光景だった。
彼女には判っている。
この力は、呪いそのものだった。
「私が呪いなら、イチもまた呪いか」
「その通りデス、レイ。貴女達は一切合切全てが正反対でありながら、同一以外のものではあり得ナイ」
だって、狂っているデショウ？　魔術師は微笑む。魔術師は微笑んで、その言葉を口にする。
「悪意を知らない人間、なんて。ネ？　それはそれだけで、充分な最悪ですヨ」
レイはそれを知っていた。
恐らくは、あの少女の傍らにいるミツも、それを知っているだろう。
そして、知りながら、彼女の近くにいる。
「それにしても……」
ことり、と人形めいた仕種で首を傾けて、魔術師は唇を吊り上げた。青年の唇から、緩く煙が上がる。
「イイんですかァ、レイ？　彼女を殺せば、貴女は人間になれるのに！」

「イチと出会わせてくれた事に関しては、感謝している」
　レイは、淡々と返した。それを嘆くように、魔術師は大仰に空を仰ぐ。そこにいない神を探すように。
「感謝！　貴女が寂しがり屋だなんて事、知っているんですヨ」
「……」
　ちら、と彼女は視線だけを男へと向けた。彼の双眸が笑っている。動きを止めた流れの色。死んだ命の色だと、レイは思った。
「貴女はまた独りです、レイ」
「そうでもないさ」
　少女は微笑んで、その表情に魔術師は完全に動きを止めた。
　邪気なぞ知らない子供の顔で、レイは思う。今思っている事を告げたら、この男はどんな顔をするだろうか。
　だから彼女は、それを口にした。
「お前がいるだろう？」
「ーーー」
「私にはお前さえいれば良いんだよーー」

　カイ。

　呼ばれた二つの音に、魔術師は微笑んだ。それを嘲笑と言う者はいないだろうと、レイはそう思う。
　心から満足気に、魔術師は言った。
「はいはァい。そうデスとも！　私はカイですヨ、レイ！　貴女に出会ったその瞬間から、私はカイなんデス」

　貴女が生まれる前から。
　貴女に出会うと知ってから。
　もっとずっと、気が遠くなる程の昔から。

　光の一つが、飽きたように揺らめいて、火花を散らして爆ぜた。

「おかあさん」
　ミツが覚えている一番最初の記憶は、一人の赤子との出会いだった。そこから、彼の人生は始まっている。
　彼自身は、三歳か、四歳くらいだった筈だ。
　慕う母の姿が見えない事に気付いて、探し求めていたような気がする。そんな事は勘違いで、ただ単に母親に呼ばれて近付いただけのような気もする。
　覚えているのは、母親の腕に見知らぬ赤子がいたという、その事だけだ。
「おかあさん」
　ちょこちょこと近付いて、服を引っ張る息子の頭を、母は眼を和ませて優しく撫でた。或る程度成長したらほぼ無一文で旅に出させるような鬼畜だなんて、あの頃に想像出来る筈が無い。
　ミツは、大好きな母親に抱かれている赤子に、当然のように視線を向けた。
「このこ、だれ？」
「うん？」
「びょうきなの？」
　覗き込んだ子供の肌の色は、真っ赤だった。くすくすと、母が可笑しそうに笑う。
「知っているかい？　このくらいの子供はね、赤子と呼ぶんだ」
「あ、か、ご？」
　今思えば、幼い子供にそんな言葉を教える母親というのもなかなか珍しいものなのかも知れないが。
　ミツは興味津々で、母親の腕の中を覗き込んだ。『赤子』はむずがりもせず、すやすやと大人しく眠っていた。
「可愛いだろう？」
「かわいい」
「そうだろう、そうだろう！　可愛いものなんだよ。可愛くて当然なんだ。そうやって、子は親に取り入るのだから」
　にっこりと、多分これ以上無く上機嫌に、ミツの母親は息子に語り掛けた。ミツが『かわいい』と言ったのはそう思ったからではなく、母親の言葉をそっくりそのまま繰り返しただけなのだという事を承知の上で。
　言われた言葉の意味なんて、半分どころか一割も一分も判る筈が無い。
「ミツも、ほんの数年前はこんなだったのだぞ」
　にやにやと笑って言う母親と、それをきょとんとして見上げる幼児。父親がいたら、その妙な光景にいつものように顔を引き攣らせた事だろう。
「おれはかわいくない？」
「まさか！　可愛いよ。可愛いとも。親にとって子はいつまで経っても可愛いものなのさ。月並みだがね」
　紛れも無く慈愛の笑みを浮かべて、彼女はそう言った。
　そしてその表情のままで腕の中の赤子に視線を落とすと、息子に向かってゆったりと語り聞か

せる。
「今日から君の妹だよ。君が守るものだ」
　言われた意味なんて、判らなかった。
　母親も、息子が言葉を理解するなんて考えてもいなかっただろう。恐らく彼女は、ただ決定された事実を口にしただけだ。
「いもうとって？」
「家族、という意味だ。私や、父様と同じ」
「おかあさんと、おとうさんと」
　ミツは恐らく、その年頃の子供としてはそれなりに言葉の意味を知っていた。だから、その一点のみ、彼は納得した。
「いっしょ」
「その通り！　流石我が息子。私は嬉しいぞ」
　鷹揚に母親が頷く。十年以上経ってからも、ずっと変わらない様子で。
「なまえは？　おかあさん」
　拙い口調での質問に、彼女の機嫌は更に向上したようだった。息子の頭を軽く叩きながら、噛み締めるような口調で教えてやる。
「彼女の名は、イチと言う」
「イチ？」
　首を傾げたミツに、彼女は微笑した。
　その時になって唐突に、時期が冬であった事を思い出す。光を浴びた時のイチの髪と同じ色のものが、地面を薄らと覆っていたのだ。
　だから小さな子供は思った筈だ。自分であったら、と。そして眼の前の母親も、同じ名前を付けるだろうと。
「なんで、イチなの？」
　不思議そうな顔をしたままの子供に、母親が眼を細める。そして言葉を紡いだ。意味なぞ理解しない事を承知で。
「運命にそう決められているからだよ、私の愛しいミツ。……雪は、簡単に汚れて仕舞うからね」
「ふうん……」
　多分子供の意地で、判ったフリをして頷いた時、それまで大人しかった赤子が泣きそうに顔を歪めた。
「わ……」
「お早う、イチ」
　泣く、と思って身を引いたミツに小さく笑って、彼女は赤子へと優しく話し掛ける。それだけで子供は落ち着いて、ゆっくりと瞬いた。
「イチ？」
　恐る恐る、ミツも近付く。不思議そうな顔で、イチが子供を見下ろした。
「ーーーー」

息を飲んだーーのだと、思う。確か。
あの時の紅が、今も胸の一番奥に突き刺さったままだ。
「ミツ」
呼ばれて、子供は慌てて、赤子の手を握った。
「おれ、ミツ。よろしくね、イチ」
当然のように、赤子は答えないままだったが。

あの瞬間からずっと、ミツは、イチの為に存在している。
影の無い少女。赤眼の異端。母親に言われるまでもなく、彼が守り抜いたもの。今までもそうだったように、これからもそうだろう。
「運命、ね……」
母親があの時口にした言葉の意味は、今も判らない。問うても答えてはくれないだろう。
けれど、それでも。
あの出会いを運命とするならば、成る程それは良い言葉ではないかと、ミツは笑った。